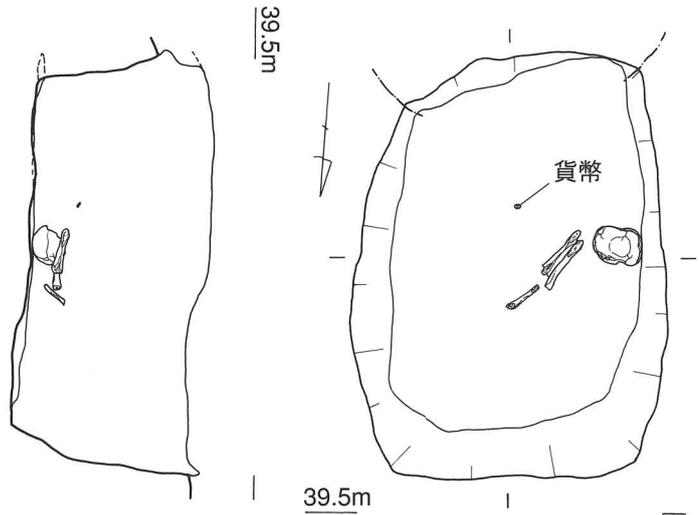
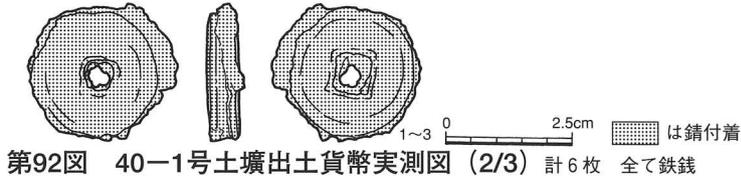


40号土壙

A区北側で検出された。40号土壙については、2遺体分の人骨が約10cmの上下差で発見されたが、土壙の切り合い関係が確認されないため、1つの土壙に2遺体が埋葬された可能性も考えられる。上位から発見された人骨及び副葬品を40-1号、下位のものを40-2号とした。さらにこの土壙は、53号土壙を切る。40号土壙の形状は、長軸1.69m短軸1.26mの隅丸長方形を呈し、残深0.8mを測る。主軸は、N-4°-Wである。



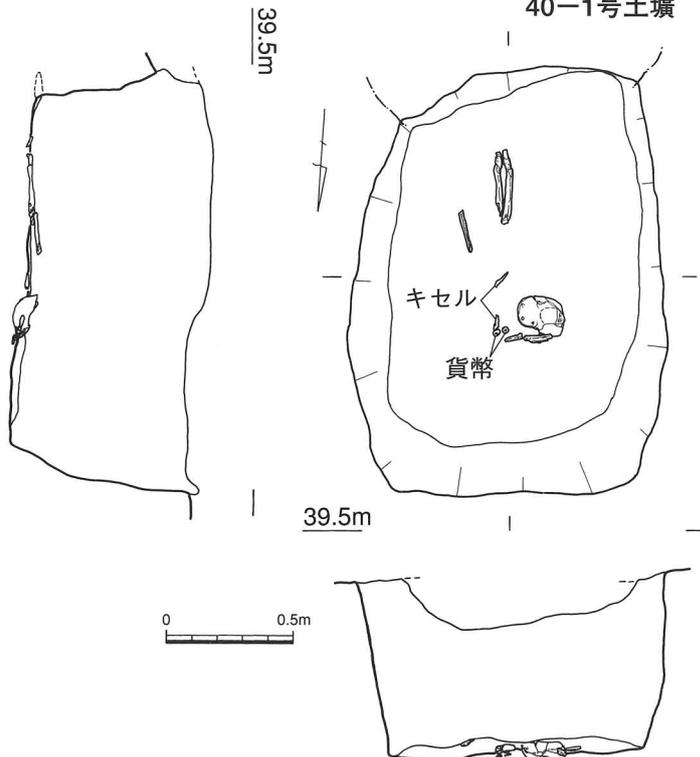
第91図 40-1号土壙実測図 (1/30)



第92図 40-1号土壙出土貨幣実測図 (2/3) 計6枚 全て鉄銭



40-1号土壙



第93図 40-2号土壙出土貨幣実測図 (1/30)

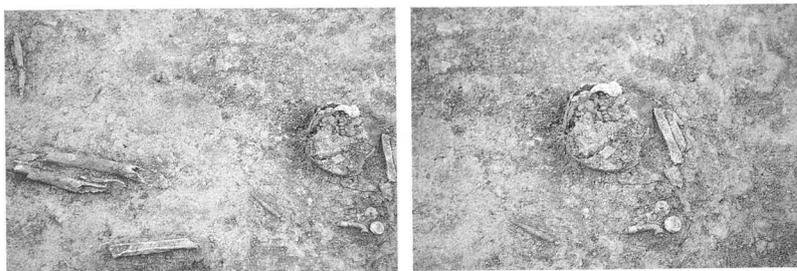
40-1号土壙から出土した人骨は、頭骨は西に位置し、南側に右耳、北側に左耳、顔面は上面を向いた状態である。出土した貨幣はすべて鉄銭である。

40-2号土壙から出土した人骨は、頭骨が中央よりやや北側にあり、左耳が西側に位置する。土壙南側で大腿骨などの足骨が出土した。

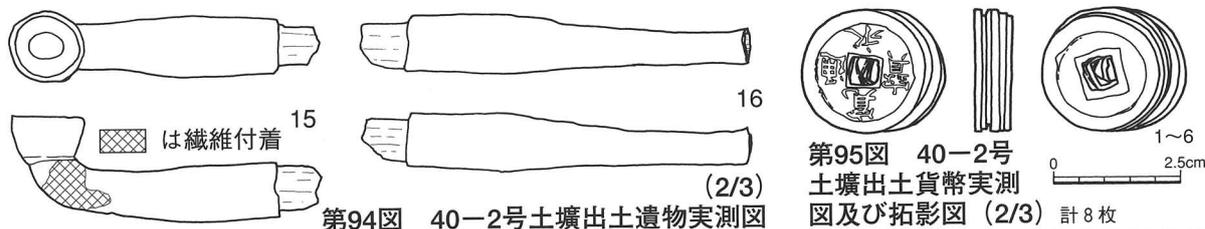


40-2号土壙

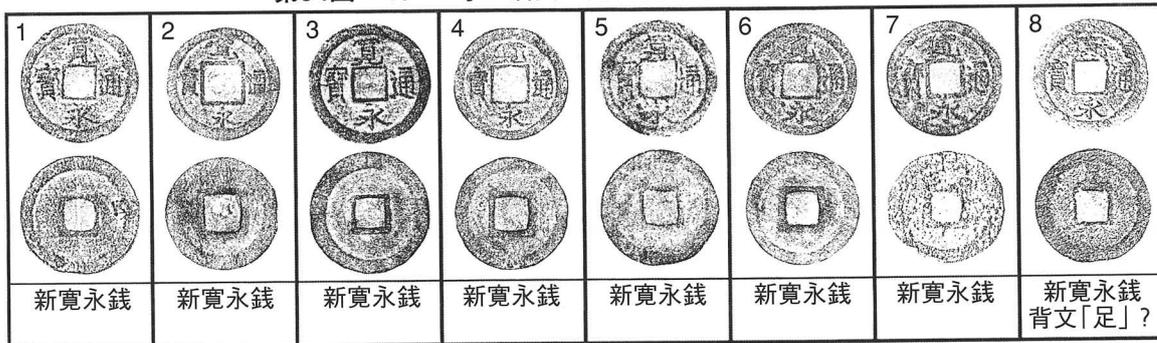
頭骨の東側に、貨幣8枚セットと、キセルが出土した。貨幣はすべて寛永通寶である。



40-2号土壙



第94図 40-2号土壙出土遺物実測図

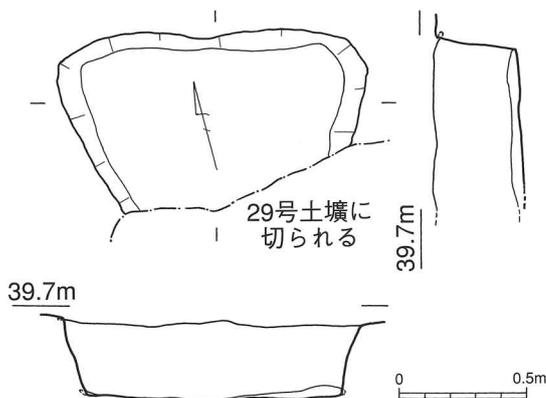


41号土壙

29号土壙北側で検出された。29号土壙に切られ、44号土壙を切る。土壙は、残長0.72m×1.22m、残深0.36mを測る。形状は隅丸方形か？

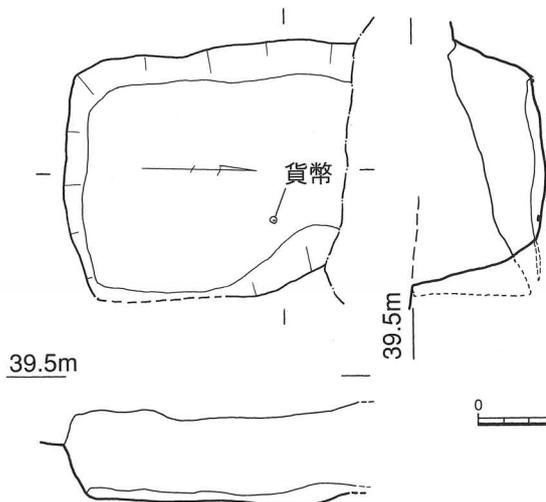


41号土壙



主軸は、N-15° -Eをとる。人骨や遺物の出土はない。

第96図 41号土壙実測図(1/30)



第97図 42号土壙実測図(1/30)

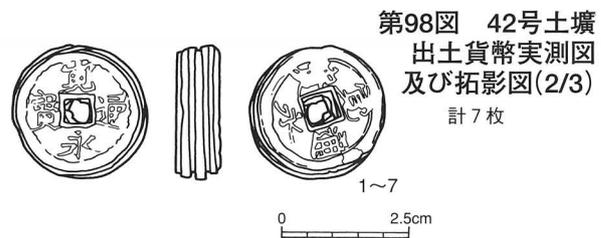
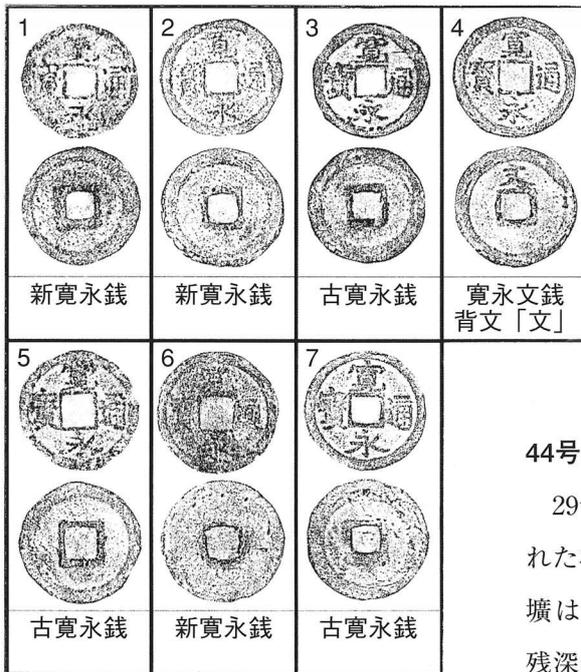


42号土壙

42号土壙

29号土壙の南側に位置する。29号土壙に切られ、50号土壙、55号土壙を切る。

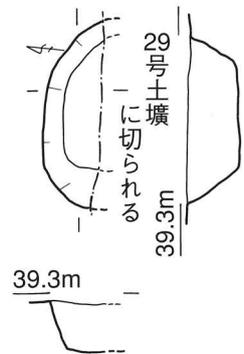
土壙の形状は、残長軸1.15m短軸1.03mで隅丸長方形を呈する。残深は0.52mを測る。主軸は、N-1.5° -Wである。人骨は発見されない。床面直上で、貨幣が7枚セットで出土



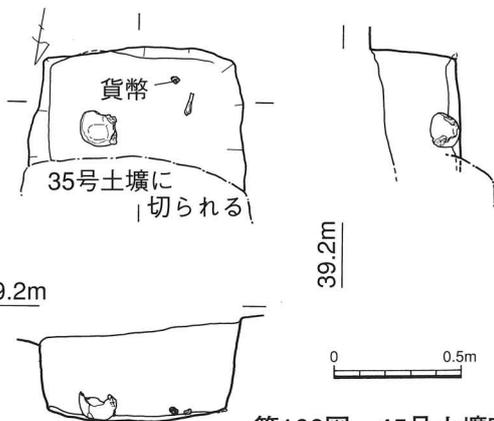
した。すべて寛永通寶である。このほか、鉄釘が出土した。

44号土壙

29号土壙と41号土壙に切られた状態で、検出された。土壙は、残長0.74m×0.24m、残深0.21mである。南北に主軸をとる可能性が高い。人骨や遺物は確認されなかった。

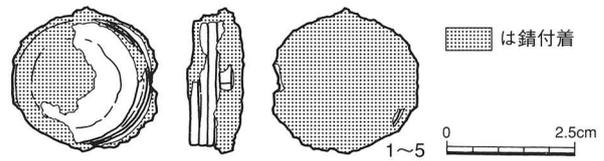


第99図 44号土壙 実測図 (1/30)



45号土壙

35号土壙の北側で検出された。35号土壙に切られる。残長0.57m×0.89mで南北に長い隅丸長方形を呈すると考えられる。残深は0.4m。土壙の主軸は、N-9°-Wをとる。人骨が床面直上で発見された。人骨の南側で貨幣が5枚セットで出土した。錆に覆われていたため、そのままの状態での保存した。このほか、鉄釘が出土している。



第101図 45号土壙出土貨幣実測図 (2/3) 計5枚



45号土壙

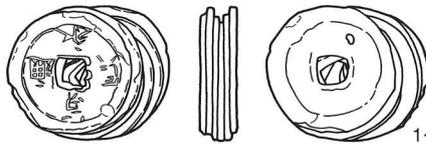
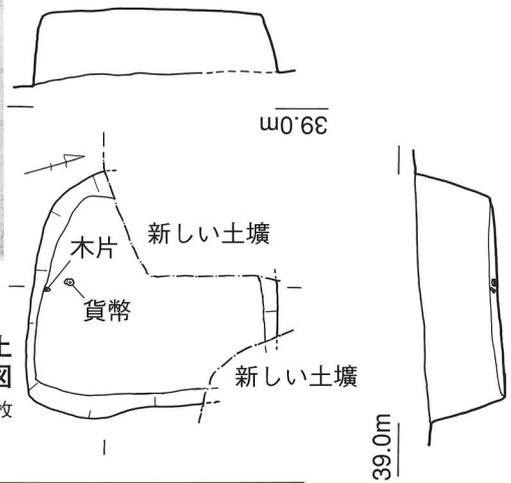
48号土壙

A区北東で検出された。新しい土壙によって北東と北西の角を切られる。北側に位置する51号土壙を切る。土壙は、長軸0.98m短軸0.91mの隅丸長方形か？残深0.36mを測る。土壙中央の床面約8cmのところで、人骨片が発見された。南端の床面直上から、木片と貨幣が7枚セットで出土した。すべて寛永通

寶である。このほかに、
鉄釘が出土。



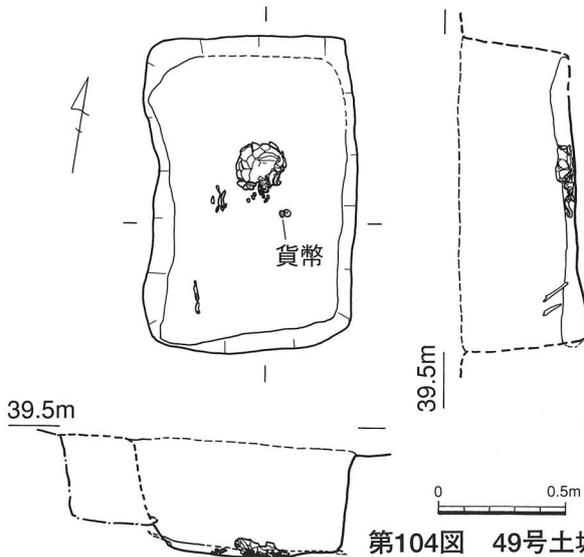
48号土壙



第103図 48号土壙出土
貨幣実測図及び拓影図
(2/3) 計7枚

1	2	3	4	5	6	7
新寛永銭	寛永文銭 背文「文」	新寛永銭 背文「小」	古寛永銭	古寛永銭	寛永通寶 詳細不明	寛永通寶 詳細不明

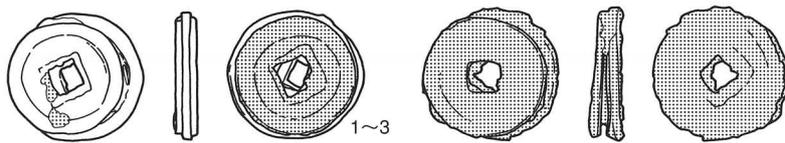
第102図 48号
土壙実測図
(1/30)



49号土壙

A区北西端で検出された。北側と西側を新しい土壙に切れ、南側の54号土壙を切る。土壙の形状は、長軸1.2m短軸0.85mの隅丸方形を呈し、残深0.52mを測る。N-9°-Wに主軸をとる。床面直上から、人骨が発見された。土壙中央で、頭骨や歯、肋骨が、土壙南西端で足の骨が出土した。頭骨の南側で、貨幣が7枚セットで出土した。1～3・6は寛永通寶、4・5・7は鉄銭。

第104図 49号土壙実測図 (1/30)



1	2	3	6
新寛永銭	古寛永銭	新寛永銭	新寛永銭

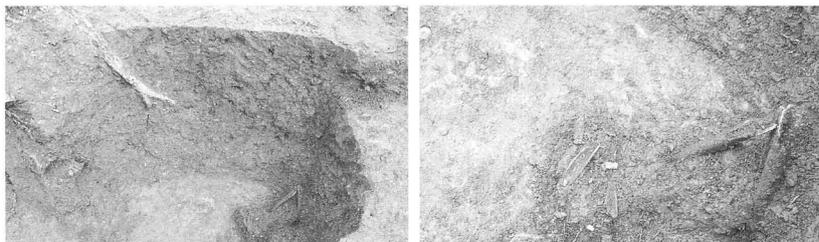
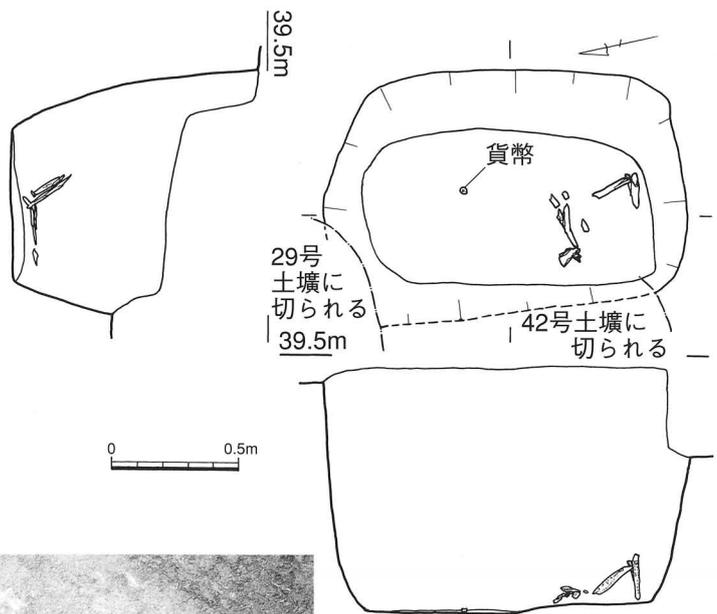
第105図 49号
土壙出土貨幣
実測図及び
拓影図(2/3)
計7枚 7は破片



49号土壙

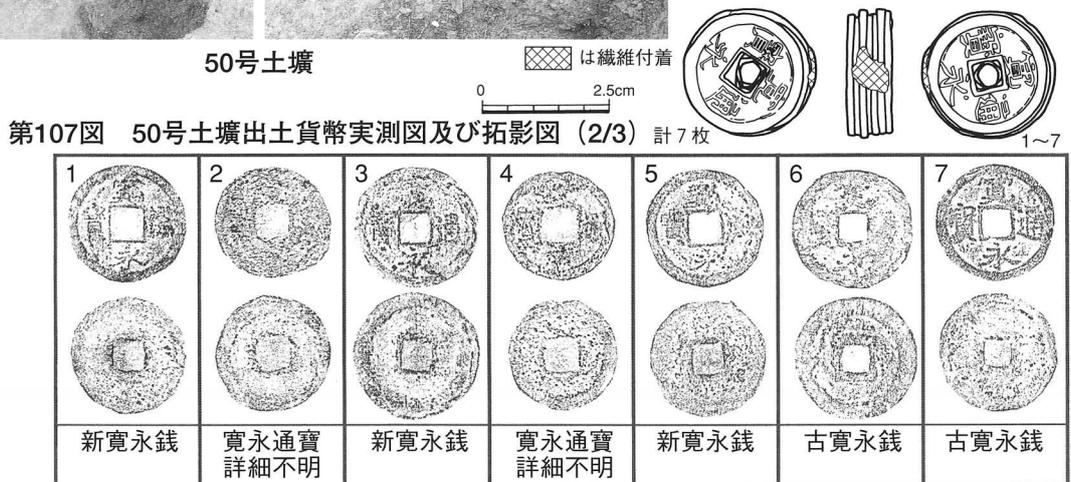
50号土壙

29号土壙の南側で検出された。29号土壙と42号土壙に切られる。造成土に掘り込んでいる。土壙の形状は、長軸1.41m 短軸1.02mの隅丸長方形を呈し、残深0.97mである。N-13° -Eを主軸にとる。土壙に南側床面直上で人骨が発見された。また、北寄りで貨幣の7枚セットが出土した。繊維が付着している。すべて寛永通寶である。ほかに、鉄釘が出土した。



50号土壙

第106図 50号土壙実測図 (1/30)



第107図 50号土壙出土貨幣実測図及び拓影図 (2/3) 計7枚

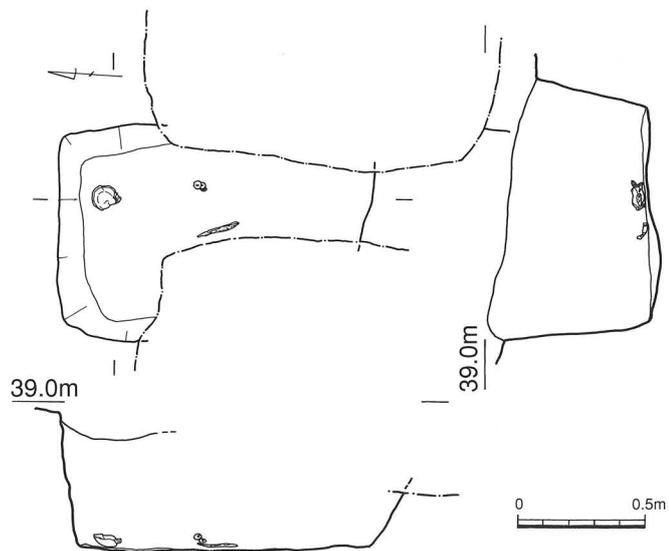
1	2	3	4	5	6	7
新寛永銭	寛永通寶 詳細不明	新寛永銭	寛永通寶 詳細不明	新寛永銭	古寛永銭	古寛永銭



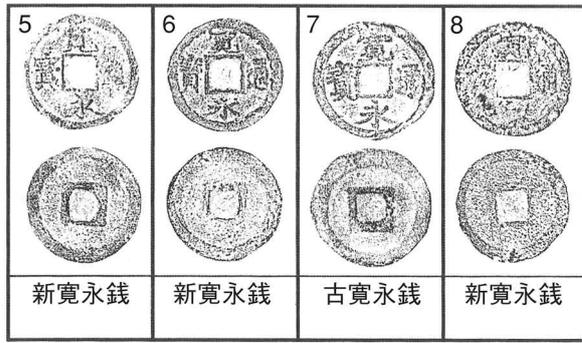
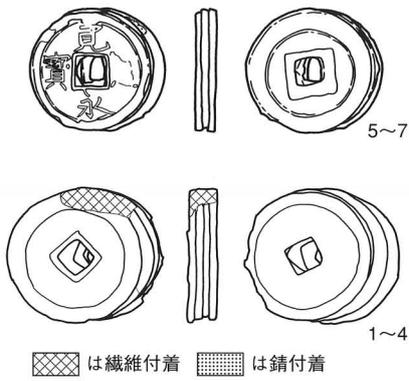
51号土壙

51号土壙

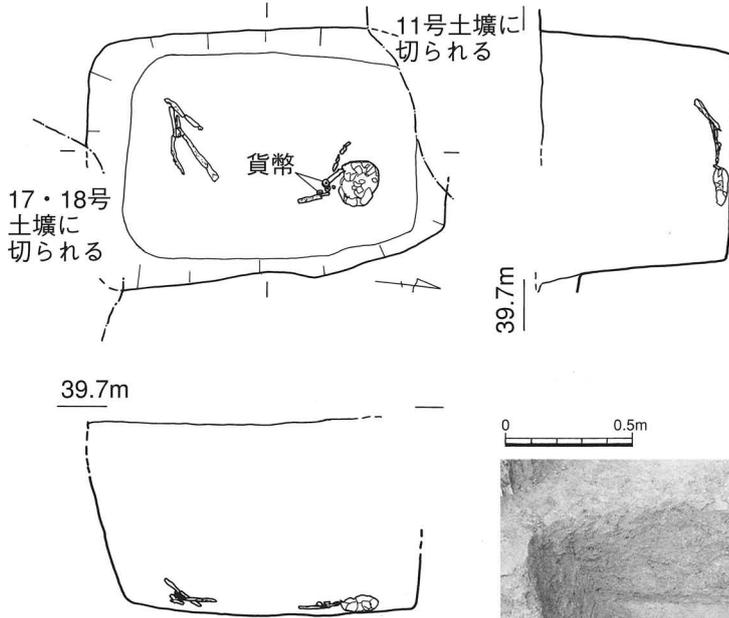
48号土壙の北側で検出された。48号土壙と新しい土壙に切られる。残長1.23m×0.86mで隅丸長方形、残深0.67m。主軸はN-3° -Wをとる。床面直上の土壙中央で大腿骨、北側で頭骨



第108図 51号土壙実測図 (1/30)



第109図 51号
土壙出土貨幣実
測図及び拓影図
(2/3)
計8枚

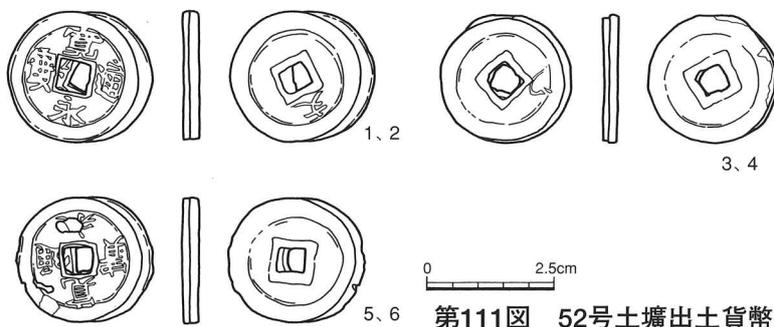


第110図 52号土壙実測図 (1/30)

が発見された。貨幣が8枚セットで出土し、1～4は繊維付着のため、保存処理を施した。このほか鉄釘出土。

52号土壙

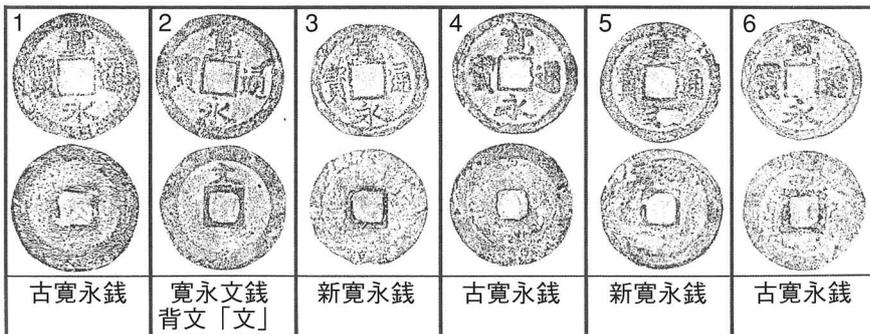
11号土壙の南で検出された。北側を11号土壙に、南側を17・18号土壙に切られる。土壙は、長軸1.4m短軸1.04mの隅丸長方形を呈し、残深は0.79mを測る。土



第111図 52号土壙出土貨幣実測図
及び拓影図 (2/3) 計6枚



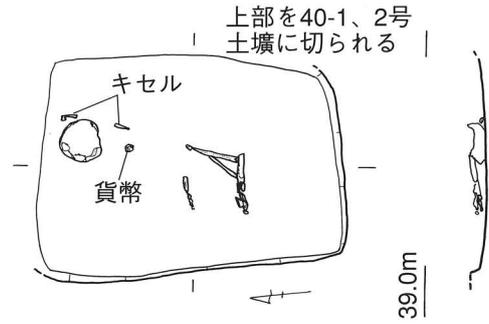
52号土壙



壙の主軸は、N-5.5° -Wである。床面直上で、北側から頭骨や腕、南側で足の骨が発見された。頭骨南側で、貨幣が6枚セットで出土した。すべて寛永通寶である。ほかに鉄釘が出土した。

53号土壙

40-1,2号土壙の下位から検出された。床面付近のみ残存する。土壙は、長軸1.21m短軸0.9mの隅丸長方形を呈する。主軸は、N-6° -Eをとる。北側で頭骨、南側で足の骨が発見された。頭骨南で貨幣が7枚のセットで出土した。鏽・繊維付着のため、保存処理を施した。頭骨の東側で、銅製キセルが出土した。他に鉄釘有り。



53号土壙

0 0.5m

39.0m

第112図 53号土壙実測図 (1/30)



17

第113図 53号土壙出土遺物実測図 (2/3)



0 2.5cm

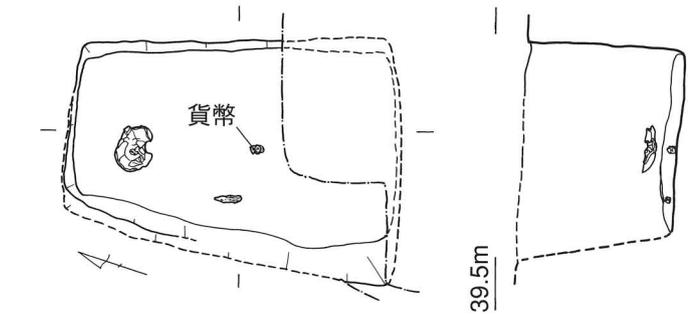
1~7

第114図 53号土壙出土貨幣実測図 (2/3)

は繊維付着
は鏽付着
計7枚

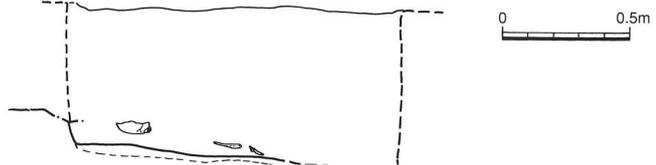


54号土壙



39.5m

39.5m

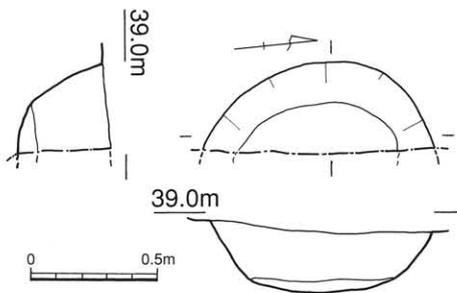
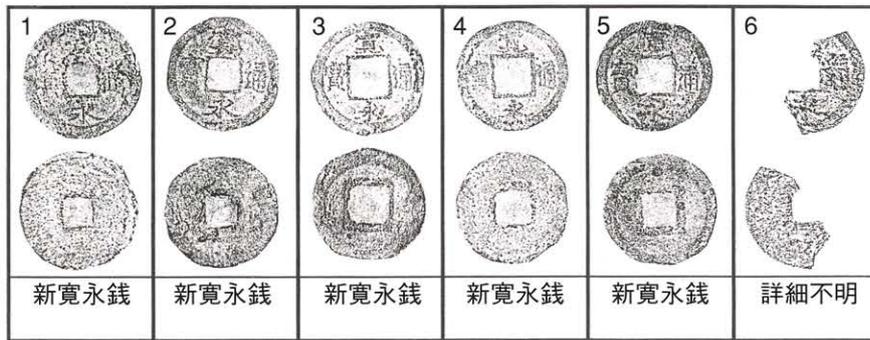
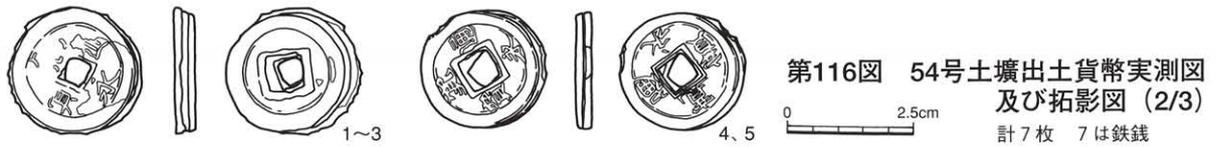


0 0.5m

第115図 54号土壙実測図 (1/30)

54号土壙

49号土壙の南側で検出された。49号土壙と新しい土壙に切られる。土壙の残長は1.26m×0.97mで隅丸長方形を呈する。土壙の残深は0.65m、主軸はN-19° -Wをとる。人骨が発見され、頭骨は土壙北側に位置する。土壙中央で、貨幣が7枚セットで出土した。1~5は寛永通寶、6は破片、7は鉄銭である。



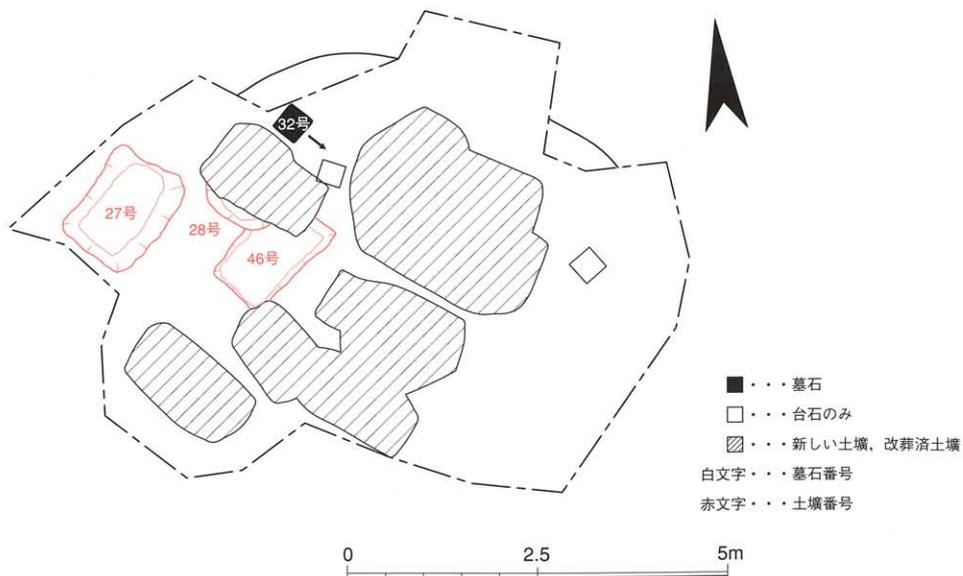
55号土壙

29号土壙の南側で検出された。42号土壙と50号土壙に切られる。残長は0.90m×0.36mで、土壙の残深は0.36mである。主軸の向きは不明。人骨や遺物の出土はない。

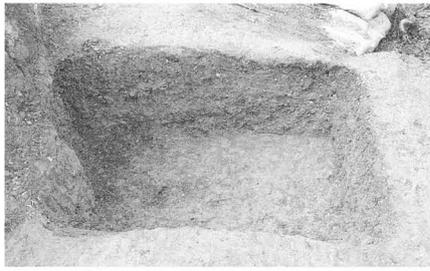
第117図 55号土壙実測図(1/30)

2 B区の土壙

B区は、A区の北東側に位置する墓域である。A区との高低差は3mで、標高は37mである。B区は改葬済みの土壙や新しい土壙が多く、調査対象土壙は3基が検出された。



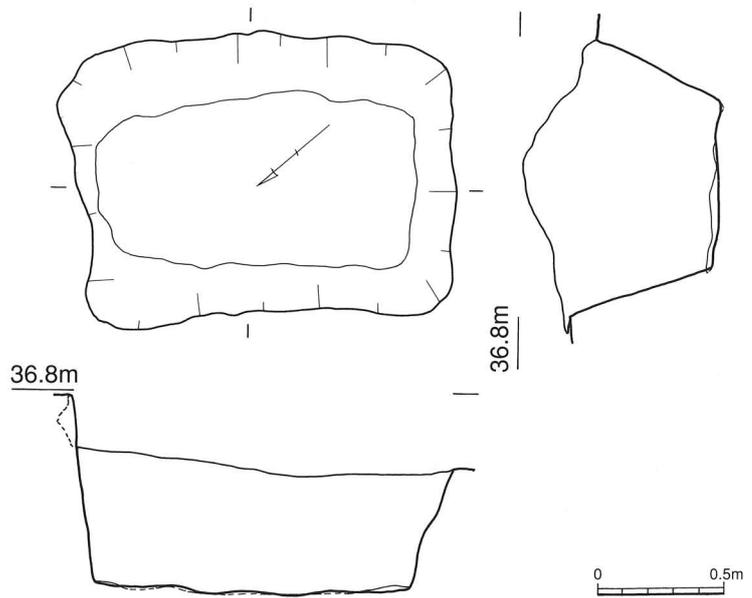
第118図 B区墓石・土壙配置図



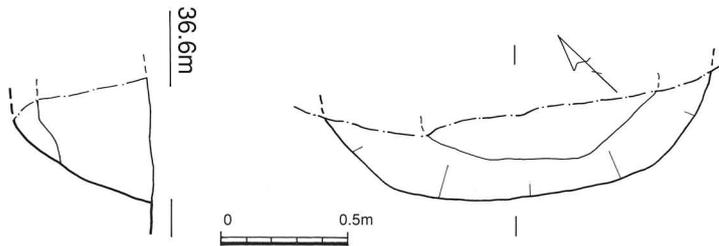
27号土壙

27号土壙

B区西端で検出された。土壙は、長軸1.56m短軸1.18mの隅丸長方形を呈し、残深は0.78mを測る。土壙の主軸はN-41° -Wをとる。人骨や遺物の出土は確認されない。



第119図 27号土壙実測図 (1/30)



第120図 28号土壙実測図 (1/30)



28号土壙

28号土壙

新しい土壙に切られ、僅かに残存する。46号土壙を切る。人骨は発見されず、鉄釘が出土した。

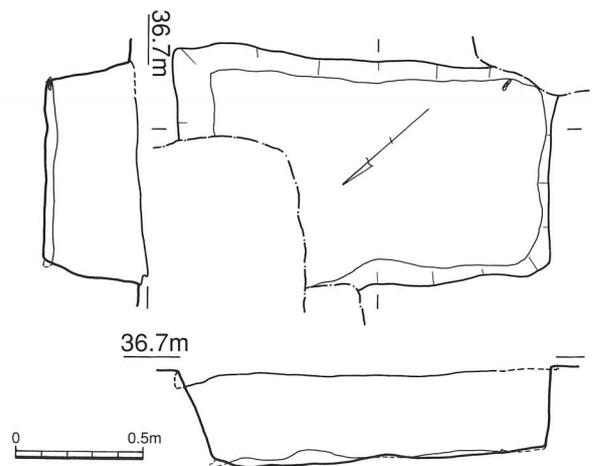


46号土壙

46号土壙

28号土壙の南東に位置する。新しい土壙や28号土壙に切られる。土壙の形状は、長軸1.51m短軸0.98mの隅丸長方形を呈する。

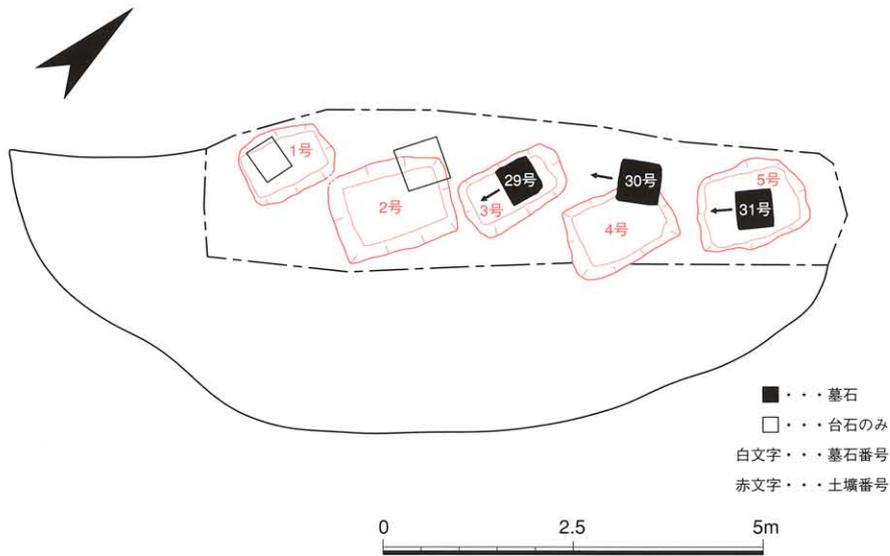
残深は0.41mをはかり、土壙の主軸はN-41.5° -Eをとる。人骨は発見されなかった。鉄釘が出土している。



第121図 46号土壙実測図 (1/30)

3 C区の土壙

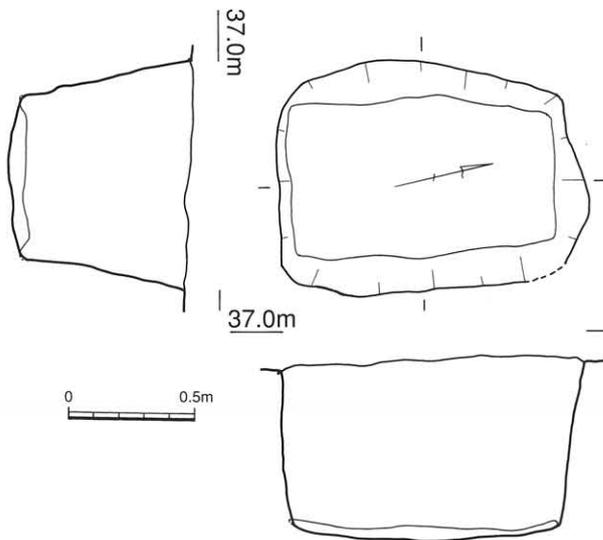
C区は、A区の南東側に位置する墓域である。A区との高低差は2mで、標高は38mである。C区は改葬済みの土壙や新しい土壙はなく、短期間のみの利用が考えられる。土壙は5基が検出され、A区側に地形に沿って並んでいる。このうち3号土壙、4号土壙、5号土壙は、墓石との対応関係が判明している。



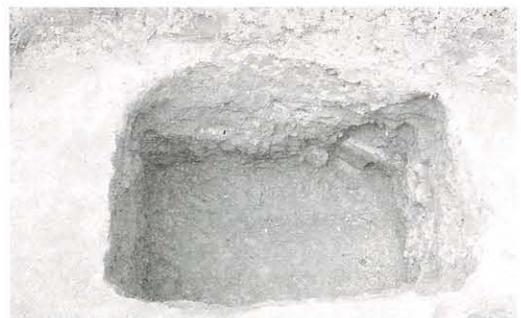
第122図 C区墓石・土壙配置図

1号土壙

南西端で検出された。土壙は長軸1.21m 短軸0.93mの隅丸長方形を呈し、残深0.73mを測る。土壙の主軸は、N-13.5° -Eをとる。人骨や遺物は確認されなかった。



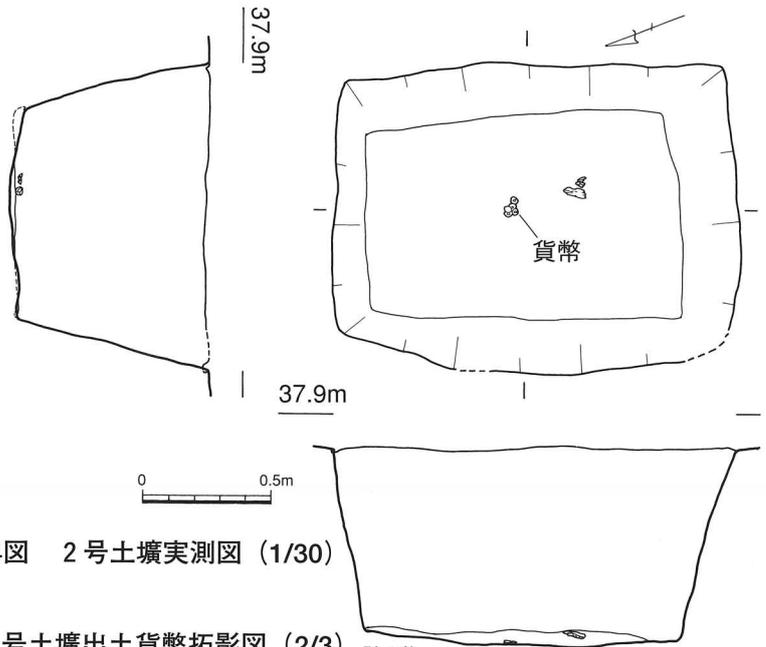
第123図 1号土壙実測図 (1/30)



1号土壙



2号土壙

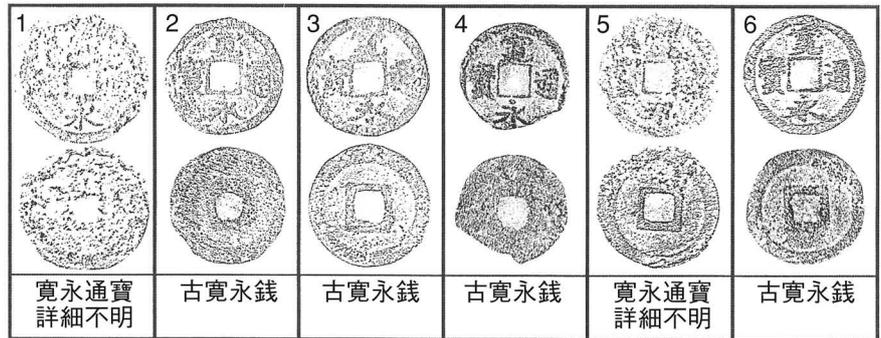


第124図 2号土壙実測図 (1/30)

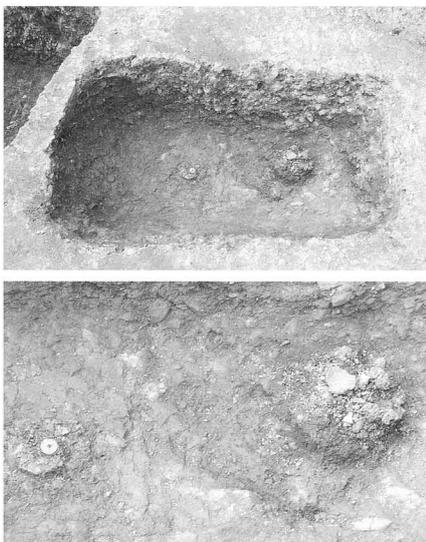
2号土壙

1号土壙の隣に位置する。土壙の形状は、長軸1.6m短軸1.23mの隅丸長方形を呈し、残深0.79mである。土壙の主軸は、N-21.5° -Eをとる。床面直上で、人

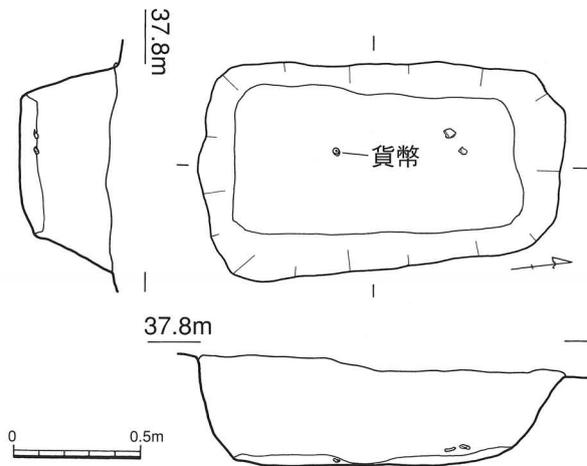
第125図 2号土壙出土貨幣拓影図 (2/3) 計6枚



骨片が発見された。土壙中央で、貨幣が6枚セットで出土した。すべて寛永通寶である。



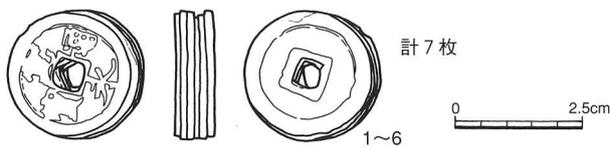
3号土壙



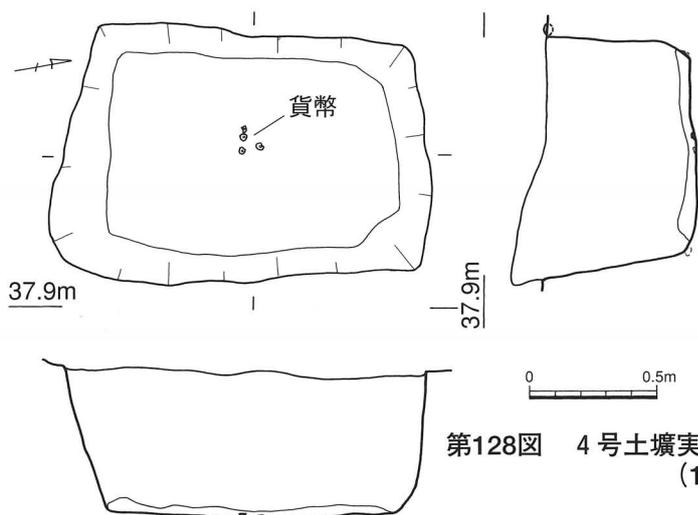
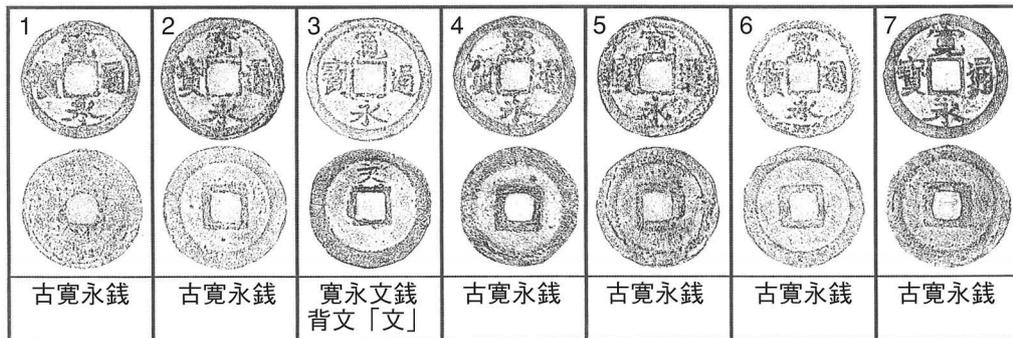
第126図 3号土壙実測図 (1/30)

3号土壙

2号土壙の隣で検出された。土壙の形状は、長軸1.49m短軸0.85mの隅丸長方形を呈し、残深0.44mを測る。土壙の主軸はN-9° -Eをとる。床面直上で、人骨片が発見された。床面中央で貨幣が7枚のセットで出土した。すべて寛永通寶である。29号墓石と対応する。



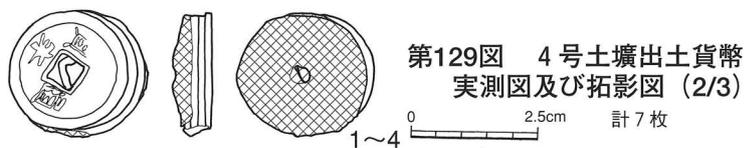
第127図 3号土壙出土貨幣実測図及び拓影図 (2/3)



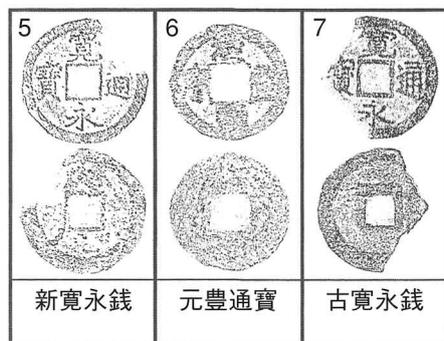
第128図 4号土壙実測図 (1/30)



4号土壙



第129図 4号土壙出土貨幣実測図及び拓影図 (2/3)



☒ は繊維付着

4号土壙

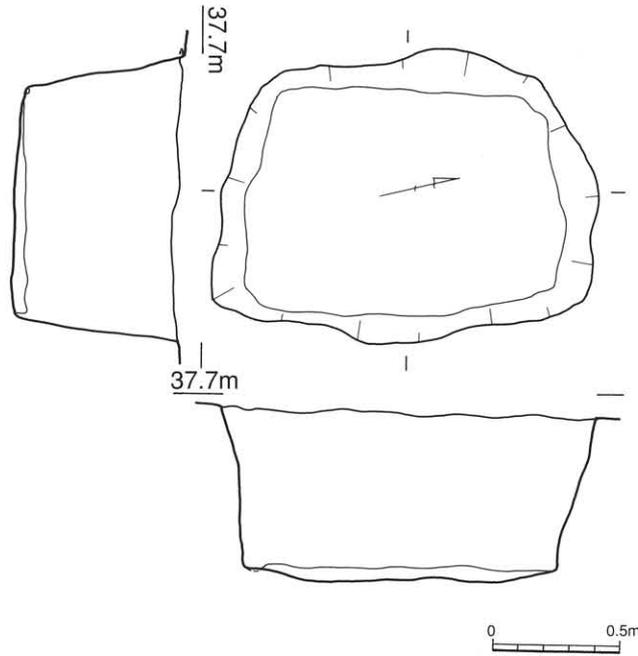
3号土壙の隣で検出された。土壙の形状は、長軸1.5m短軸1.02mの隅丸長方形を呈し、残深0.6mを測る。土壙の主軸はN-9°-Eをとる。土壙中央の床面直上で、貨幣が7枚セットで出土した。1~4は、繊維に覆われていたためそのままの状態、保存処理を施した。5・7は寛永通寶、6は元豊通寶である。30号墓石と対応する。



5号土壙

5号土壙

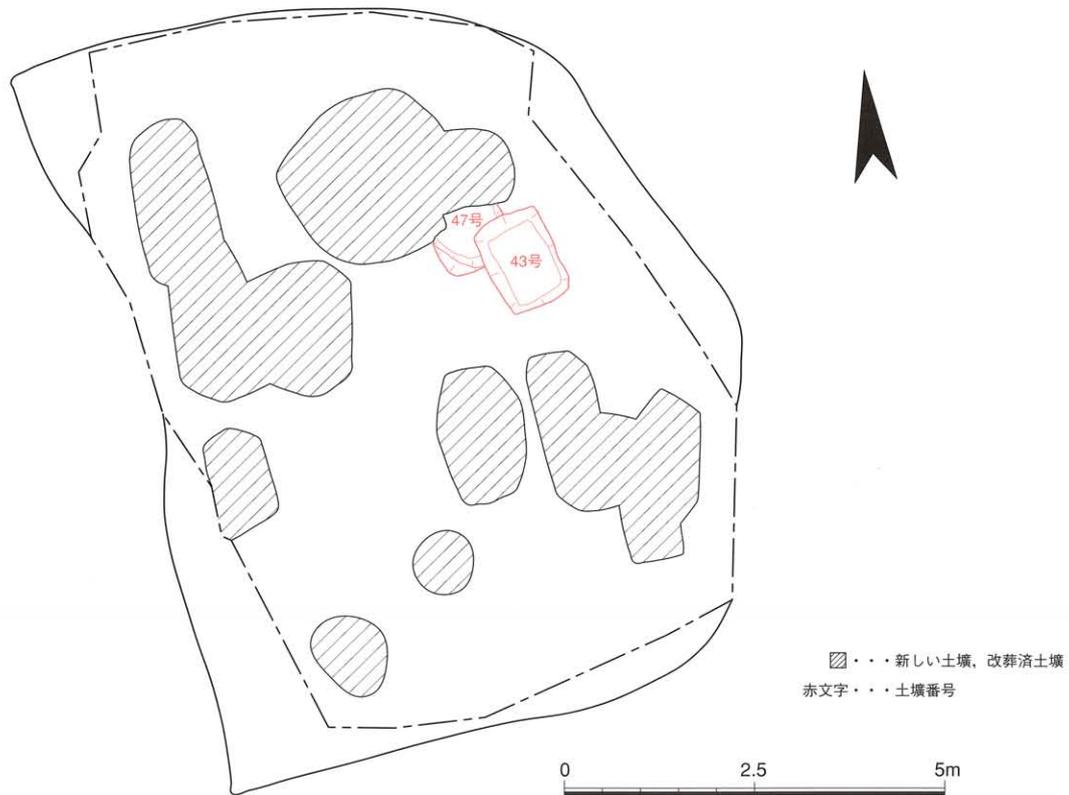
C区で最も北東に位置する。土壙の形状は、長軸1.51m短軸1.16mで隅丸長方形を呈し、残深は0.67mを測る。土壙の主軸は、N-13° -Eをとる。人骨や遺物の出土はなかった。31号墓石と対応する。



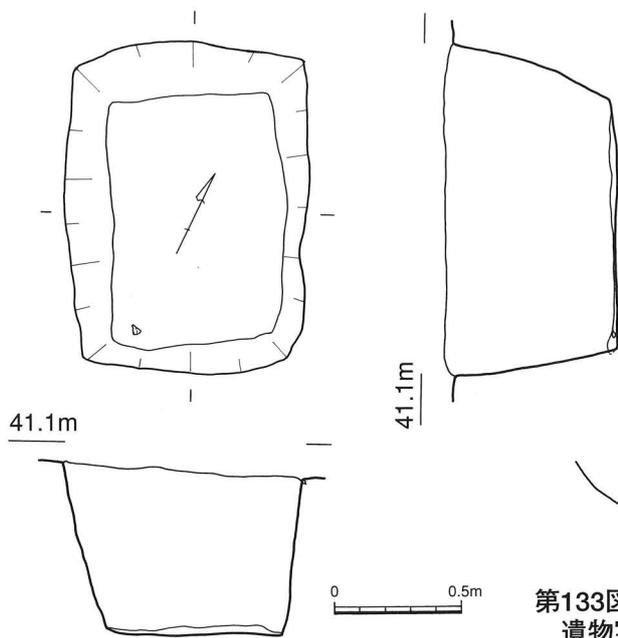
第130図 5号土壙実測図 (1/30)

4 D区の土壙

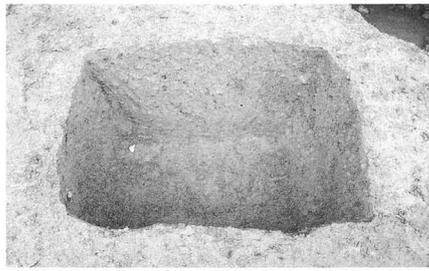
D区は、A区の西側に位置する墓域である。A区との高低差は1.5mで、標高は約41.5mである。D区は改葬済みの土壙や新しい土壙が多く、調査対象土壙は2基が検出された。



第131図 D区土壙配置図



第132図 43号土壙実測図 (1/30)



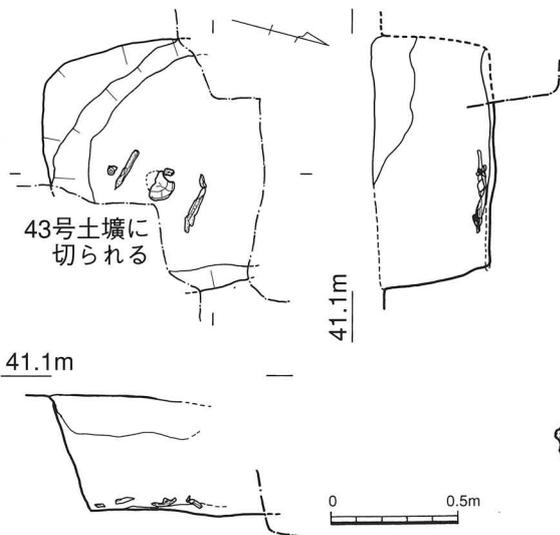
43号土壙

43号土壙

D区の東寄りで見出された。47号土壙を切る。土壙の形状は、長軸1.31m短軸0.95mの隅丸長方形を呈し、残深0.69mを測る。土壙の主軸は、N-26.5° -Wをとる。人骨は発見されない。土壙

南端床面直上で、陶磁器片1点が出土した。土壙に伴うものではない。

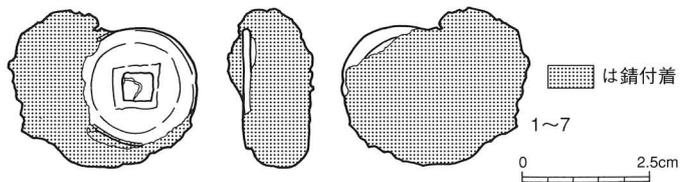
第133図 43号土壙出土遺物実測図 (1/3)



第134図 47号土壙実測図 (1/30)



47号土壙



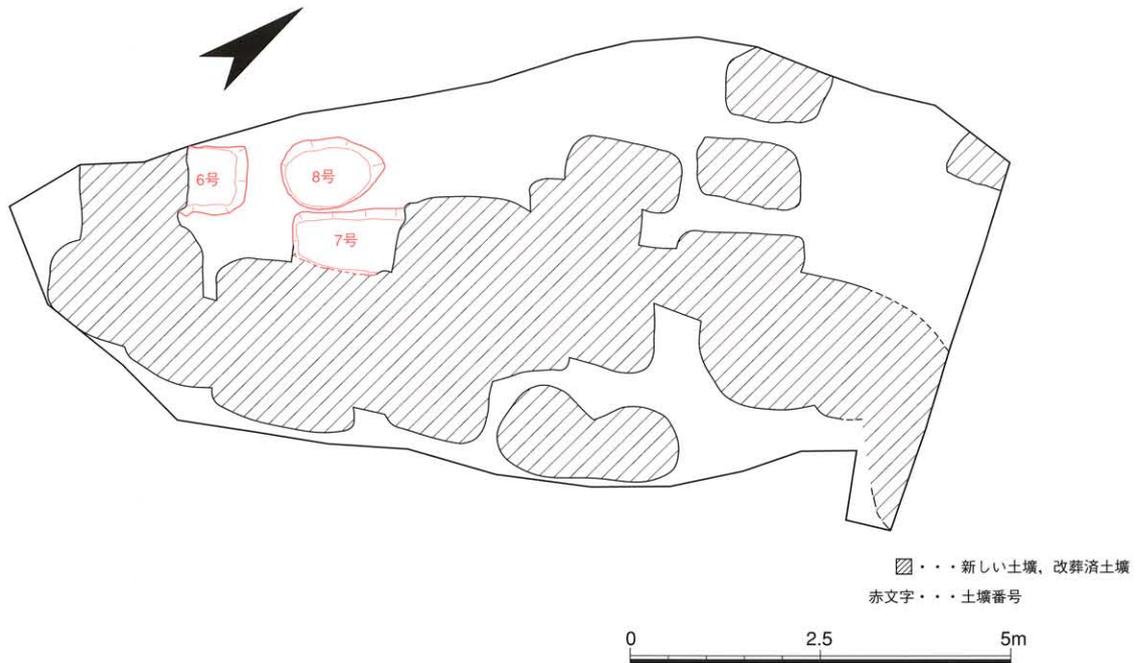
第135図 47号土壙出土貨幣実測図 (2/3) 計7枚

47号土壙

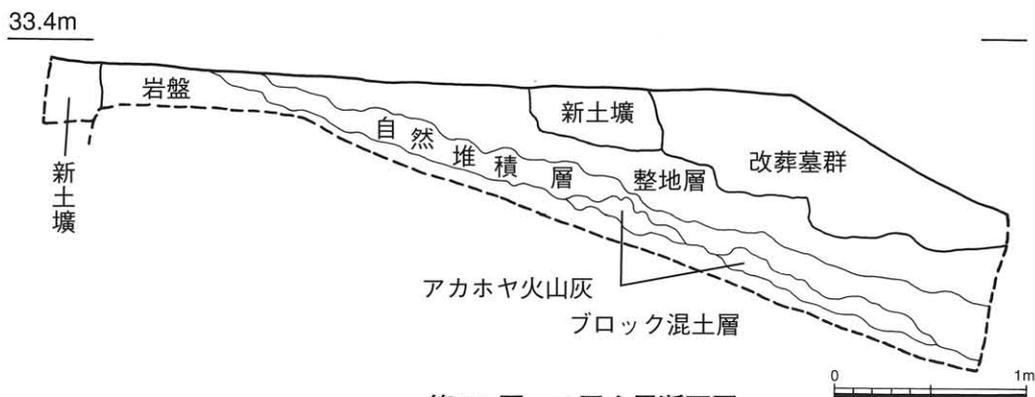
43号土壙の西側で見出された。43号土壙と新しい土壙に切られる。土壙は、残長0.85m×1.0mで、隅丸長方形の可能性が高い。残深は、0.48mを測る。土壙の主軸はN-15.5° -Wである。床面直上で、人骨と、貨幣が発見された。貨幣は7枚セットで錆に覆われていた。

5 E区の土壙

E区は、川子地区墓地群の上段に位置する墓域である。標高は約33mである。土壙は、岩盤の上の自然堆積層や整地層に掘り込まれる。E区は改葬済みの土壙や新しい土壙が多く、調査対象土壙3基を検出した。6号土壙は、整理作業の段階で、明治～大正以降の所産であることが判明した。



第136図 E区土壌配置図



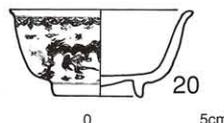
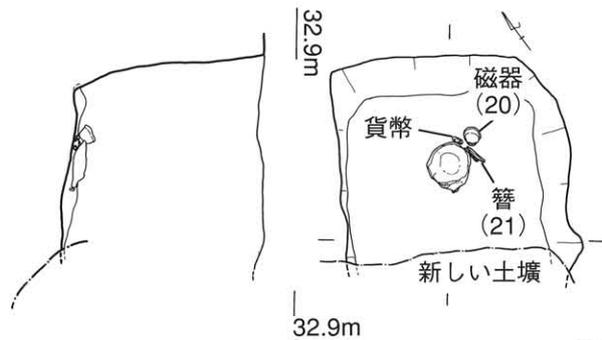
第137図 E区土層断面図

6号土壌

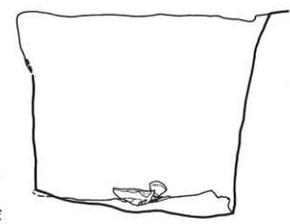
土壌南側を新しい土壌で切られる。土壌は、残長0.9m、幅1.0mで隅丸長方形を呈するか？残深0.75m。土壌の主軸は、N-36.5°-Eである。床面から頭骨が発見され、その周囲でベッコウ製管2点、磁器1点、8枚セットの貨幣が出土した。磁器の年代から土壌は明治～大正以降のものであることが判明した。



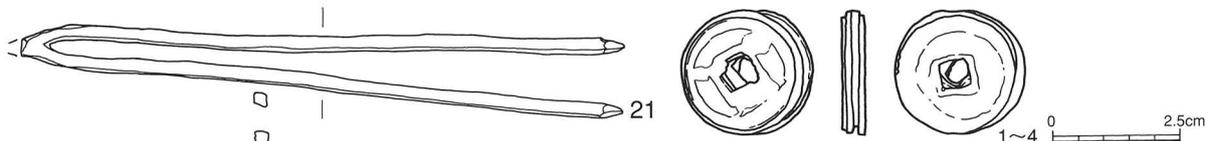
6号土壌



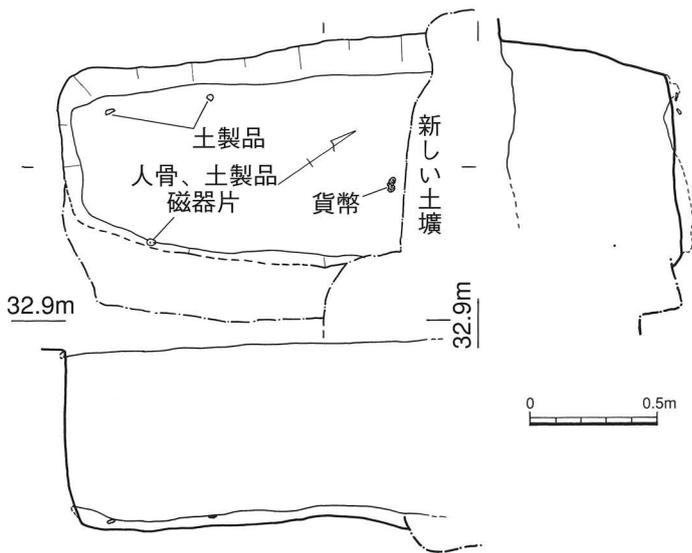
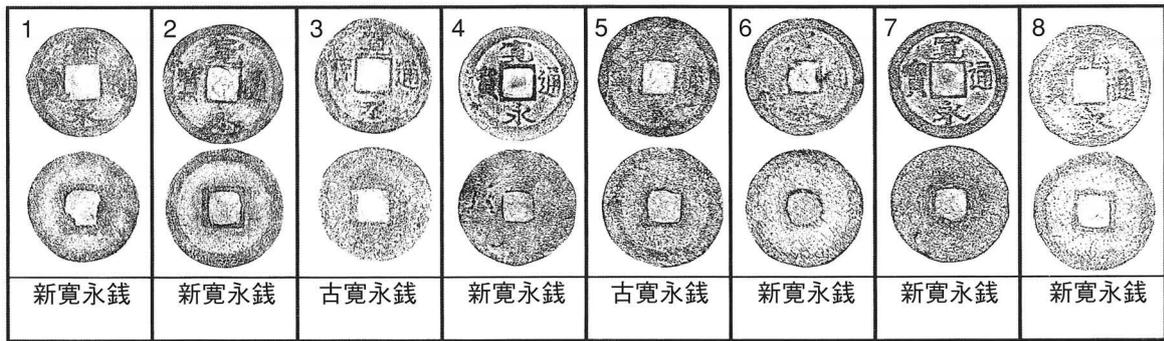
第139図 6号土壌出土遺物実測図 (1/3)



第138図 6号土壌実測図 (1/30)



第140図 6号土壙出土遺物実測図(2/3) 第141図 6号土壙出土貨幣実測図及び拓影図(2/3) 計8枚



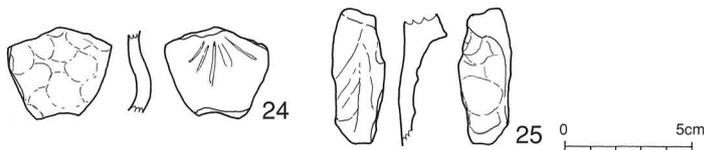
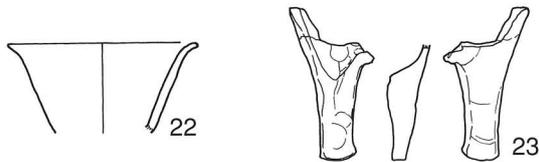
第142図 7号土壙実測図(1/30)



7号土壙

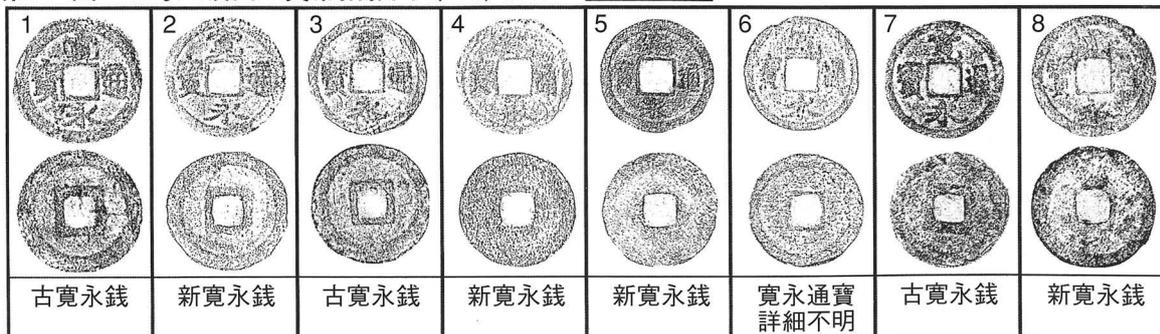
7号土壙

7号土壙は、北側と東側を新しい土壙や改葬済土壙に切られる。土壙は、長軸1.45m短軸0.9mで隅丸長方形か？残深は0.8m。人骨は、土壙の東壁付近で僅かに発見された。同じ地点で、土製品や磁器片が出土したほか、西壁付近で土製品2点、北側で貨幣が8枚セットで出土した。貨幣以外は、土壙に伴うものかは不明である。ほかに鉄釘出土。



第143図 7号土壙出土遺物実測図(1/3)

第144図 7号土壙出土貨幣拓影図(2/3) 計8枚



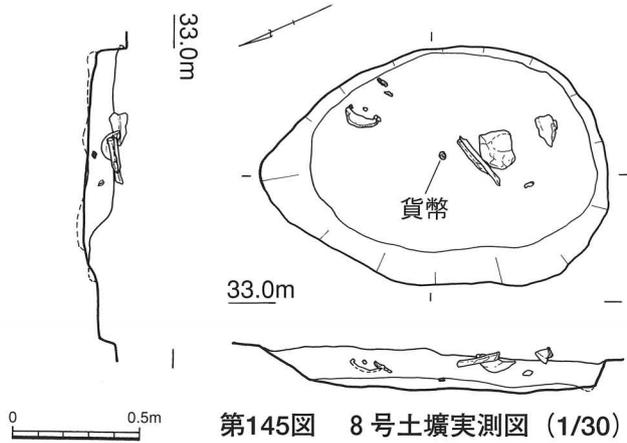


8号土壙

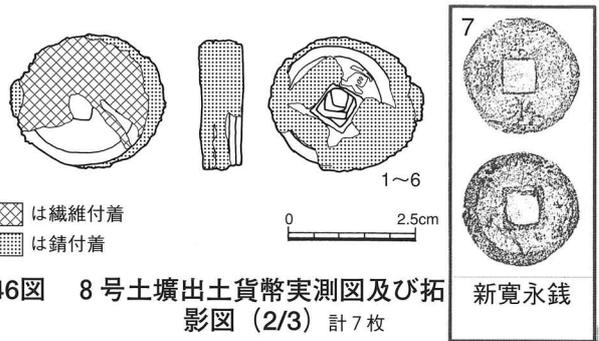
8号土壙

7号土壙の西側で検出された。土壙は、床面付近のみ残存していた。長軸1.35m短軸0.95m

の楕円形を呈する。主軸は、N-24°-Eをとる。頭骨や大腿骨が発見された。土壙中心で貨幣が7枚セットで出土した。1～6は繊維及び錆が付着していたため、そのままの状態での保存処理を施した。



第145図 8号土壙実測図 (1/30)



第146図 8号土壙出土貨幣実測図及び拓影図 (2/3) 計7枚

表4 土壙観察表

A区土壙

() は残存寸法

土壙番号	図面	土壙の形状	土壙の寸法 (m)			主軸	人骨の出土	副葬品		釘の出土	備考
			平面形状	床面形状	残深			貨幣	その他		
9号	39	隅丸長方形か?	長(0.62)×幅(1.06)	長(0.53)×幅(0.71)	0.61	N-9°-W	○				10号土壙に切られる
10号	39	隅丸長方形	長(1.50)×幅1.39	長1.35×幅1.03	1.04	N-21°-W	○	9		○	9号土壙を切る
11号	41	隅丸長方形	長1.60×幅1.50	長1.30×幅1.20	0.88	N-70°-E		7			52号土壙を切る
12号	43	隅丸長方形	長1.88×幅1.75	長1.45×幅1.44	1.11	N-78°-E	○	7			
13号	45	隅丸長方形	長1.32×幅1.18	長1.09×幅0.84	0.63	N-28°-E	?	7			
14号	47	隅丸長方形	長1.29×幅0.99	長1.02×幅0.75	0.53	N-105°-W		3			
15号	49	隅丸長方形	長1.72×幅1.37	長1.29×幅0.95	0.8	N-265°-E	○	7			
16号	51	隅丸長方形	長1.59×幅1.07	長1.30×幅0.74	0.53	N-24°-E	○	7			30号土壙を切る
17号	53	隅丸長方形	長(1.20)×幅0.94	長0.96×幅0.67	0.55	N-65°-W		7			18, 52号土壙を切る 人骨腐蝕痕有り
18号	55	隅丸長方形	長(1.34)×幅1.14	長(1.24)×幅0.99	0.44	N-11°-E					17号土壙に切られる 52号土壙を切る
19号	56	隅丸長方形	長1.38×幅1.39	長1.13×幅1.04	0.7	N-24°-E	○	7			
20号	58	隅丸長方形	長1.52×幅1.28	長1.46×幅1.02	0.65	N	○	7			
21号	60	隅丸長方形	長1.67×幅0.85	長1.51×幅0.73	0.58	N-49°-W		7		○	22, 23号土壙を切る
22号	60	隅丸長方形	長1.24×幅0.76	長1.06×幅0.71	0.22	N-25°-E					21号土壙に切られる 23号土壙を切る
23号	60	隅丸長方形	長(1.21)×幅(1.25)	長(1.09)×幅(1.06)	0.47	N-34°-E					21, 22号土壙に切られる
24号	62	隅丸長方形	長(1.45)×幅(1.28)	長1.10×幅0.80	0.56	N-6°-E		1		○	
25号	64	隅丸長方形	長1.75×幅0.86	長1.60×幅0.70	0.39	N-85.5°-E					
26号	65	隅丸長方形	長1.23×幅0.96	長0.98×幅0.76	0.45	N-30.5°-E			磁器4、陶器1		
29号	67	隅丸長方形	長2.07×幅1.75	長1.61×幅1.31	1.07	N-1°-W	○	7		○	41, 42, 44, 50号土壙を切る
30号	69	隅丸長方形	長1.30×幅0.98	長1.06×幅0.65	0.64	N-23.5°-E	○	7			16号土壙に切られる
31号	71	隅丸長方形	長(1.40)×幅(1.29)	長1.15×幅0.85	0.58	N-14.5°-W		19	磁器1、数珠37	○	32, 33号土壙を切る
32号	75	隅丸長方形	長1.55×幅(0.95)	長1.35×幅0.82	0.6	N-10°-W					31号土壙に切られる
33号	76	隅丸長方形	長(1.10)×幅0.98	長(1.02)×幅0.82	0.44	N-14°-W		7	磁器1、銅製簪1	○	31号土壙に切られる

土壌番号	図面	土壌の形状	土壌の寸法 (m)			主軸	人骨の出土	副葬品		釘の出土	備考
			平面形状	床面形状	残深			貨幣	その他		
34号	79	隅丸長方形	長1.46×幅0.99	長1.05×幅0.92	1.25	N-47°-W	○	7			
35号	81	隅丸長方形	長1.26×幅(1.10)	長0.95×幅0.74	0.55	N-1°-W	○			○	45号土壌を切る
36号	82	隅丸長方形	長1.26×幅0.95	長1.07×幅0.81	0.55	N-9°-E					
37号	83	隅丸長方形	長1.54×幅(1.12)	長1.2×幅0.95	0.49	N-15°-W	○	8	鉱物片、数珠2	○	頭骨が北に位置
38号	87	隅丸長方形	長1.45×幅0.95	長1.28×幅0.82	0.41	N-76°-W			磁器2、鈴、容器片		
39号	89	隅丸長方形	長1.57×幅(1.15)	長1.48×幅(0.93)	0.45	N-25°-W		7			
40-1号	91	隅丸長方形	長1.69×幅1.26	長1.47×幅1.10	0.8	N-4°-W	○	6			53号土壌を切る
40-2号	93	隅丸長方形	長1.69×幅1.26	長1.47×幅1.00	0.8	N-4°-W	○	8	銅製キセル吸口、雁首		53号土壌を切る
41号	96	隅丸方形か?	長(0.72)×幅1.22	長(0.66)×幅1.03	0.36	N-15°-E				○	29号土壌に切られる 44号土壌を切る
42号	97	隅丸長方形	長(1.15)×幅(1.03)	長(1.06)×幅0.86	0.52	N-15°-W		7		○	29号土壌に切られる 50, 55号土壌を切る
44号	99	不明	長(0.74)×幅(0.24)	長(0.51)×幅(0.15)	0.21	軸不明					29, 41号土壌に切られる
45号	100	隅丸長方形	長(0.57)×幅(0.89)	長(0.5)×幅(0.69)	0.4	N-9°-W	○	5		○	35号土壌に切られる
48号	102	隅丸長方形か?	長0.98×幅0.91	長0.97×幅0.79	0.36	N-15.5°-E	○	7		○	51号土壌を切る
49号	104	隅丸方形	長(1.20)×幅(0.85)	長(1.14)×幅(0.77)	0.52	N-9°-W	○	7			54号土壌を切る
50号	106	隅丸長方形	長1.41×幅(1.02)	長1.13×幅0.62	0.97	N-13°-E	○	7		○	29, 42号土壌に切られる
51号	108	隅丸長方形	長(1.23)×幅(0.86)	長(1.15)×幅(0.70)	0.67	N-3°-W	○	8		○	48号土壌に切られる
52号	110	隅丸長方形	長(1.40)×幅(1.04)	長1.14×幅0.81	0.79	N-5.5°-W	○	6		○	11, 17, 18号土壌に切られる
53号	112	隅丸長方形	長(1.21)×幅(0.9)	長(1.18)×幅(0.88)	0.17	N-6°-E	○	7	銅製キセル吸口、雁首	○	40-1, 40-2号土壌に切られる、 頭骨北に位置
54号	115	隅丸長方形	長(1.26)×幅(0.97)	長(1.22)×幅0.80	0.65	N-19°-W	○	7			49号土壌に切られる 頭骨北に位置
55号	117	不明	長(0.90)×幅(0.36)	長(0.62)×幅(0.20)	0.36	軸不明					50, 42号土壌に切られる

B区土壌

土壌番号	図面	土壌の形状	土壌の寸法 (m)			主軸	人骨の出土	副葬品		釘の出土	備考
			平面形状	床面形状	残深			貨幣	その他		
27号	119	隅丸長方形	長1.56×幅1.18	長1.25×幅0.71	0.78	N-41°-W					
28号	120	隅丸方形か?	長(1.02)×幅(0.26)	長(0.63)×幅(0.15)	0.36	軸不明				○	46号土壌を切る 新土壌に切られる
46号	121	隅丸長方形	長(1.51)×幅(0.98)	長1.31×幅(0.86)	0.41	N-41.5°-E				○	28号土壌に切られる

C区土壌

土壌番号	図面	土壌の形状	土壌の寸法 (m)			主軸	人骨の出土	副葬品		釘の出土	備考
			平面形状	床面形状	残深			貨幣	その他		
1号	123	隅丸長方形	長1.21×幅0.93	長1.05×幅0.64	0.73	N-13.5°-E					
2号	124	隅丸長方形	長1.60×幅1.23	長1.24×幅0.83	0.79	N-21.5°-E	○	6			
3号	126	隅丸長方形	長1.49×幅0.85	長1.13×幅0.60	0.44	N-9°-E	○	7			29号墓石と対応
4号	128	隅丸長方形	長1.50×幅1.02	長1.13×幅0.80	0.6	N-9°-E		7			30号墓石と対応
5号	130	隅丸長方形	長1.51×幅1.16	長1.25×幅0.90	0.67	N-13°-E				○	31号墓石と対応

D区土壌

土壌番号	図面	土壌の形状	土壌の寸法 (m)			主軸	人骨の出土	副葬品		釘の出土	備考
			平面形状	床面形状	残深			貨幣	その他		
43号	132	隅丸長方形	長1.31×幅0.95	長1.02×幅0.71	0.69	N-26.5°-W			磁器1		47号土壌を切る
47号	134	隅丸長方形か?	長(0.85)×幅(1.0)	長(0.68)×幅(0.88)	0.48	N-15.5°-W	○	7			43号土壌に切られる

E区土壌

土壌番号	図面	土壌の形状	土壌の寸法 (m)			主軸	人骨の出土	副葬品		釘の出土	備考
			平面形状	床面形状	残深			貨幣	その他		
6号	138	隅丸長方形か?	長(0.9)×幅(1.0)	長(1.40)×幅(0.71)	0.75	N-36.5°-E	○	8	ベッコウ管2点、磁器1		頭骨北に位置
7号	142	隅丸長方形か?	長(1.45)×幅(0.9)	長(0.70)×幅0.75	0.8	N-35°-E	○	8	磁器1、土製品3	○	新しい土壌に切られる
8号	145	楕円形	長1.35×幅0.95	長1.10×幅0.80	0.12	N-24°-E	○	7		○	土壌残存状況不良

表5 遺物観察表

陶磁器

遺物番号	遺物名	地区	出土地点	図面番号	図面頁	器高	口径	底面径	詳細・備考
1	陶器	A区	26号土壙+表土	66	109	(5.8)	10.5	-	薩摩18cか? 混入品
2	磁器	A区	26号土壙	66	109	3.8	7.0	2.7	肥前小杯17c後半から18c前半 混入品
3	磁器	A区	26号土壙+表土	66	109	4.8	6.8	2.7	肥前系小杯18c前半か? 混入品
4	磁器	A区	26号土壙	66	109	5.8	6.9	3.8	肥前茶飲用姿の碗1780~1810年代 混入品
5	磁器	A区	31号土壙	72	109	4.0	7.1	2.8	肥前染付小杯18c前半~中葉 副葬品
7	磁器	A区	33号土壙	77	109	3.5	6.3	2.8	肥前染付小杯18c前半~中葉 副葬品
11	磁器	A区	38号土壙	86	109	5.5	11.6	4.5	肥前波佐見染付碗18c後半 混入品
12	磁器	A区	38号土壙	86	109	3.5	6.3	2.8	肥前染付小杯18c後半 混入品
19	磁器	D区	43号土壙	133	109	(2.2)	-	3.4	肥前碗18c 混入品
20	磁器	E区	6号土壙	139	109	3.5	7.2	3.5	瀬戸美濃染付銅板転写明治後半~大正 副葬品
22	磁器	E区	7号土壙	143	109	(3.6)	7.4	-	肥前白磁小杯17c後半~18c 混入品

土製品

遺物番号	遺物名	地区	出土地点	図面番号	図面頁	最大高	最大幅	最大厚	詳細・備考
23	土製品	E区	7号土壙	143	109	5.3	2.1	1.9	土製品 混入品?
24	土製品	E区	7号土壙	143	109	3.6	4.1	0.8	土製品 混入品?
25	土製品	E区	7号土壙	143	109	6.1	3.3	1.7	土製品 混入品?

金属製品

遺物番号	遺物名	地区	出土地点	図面番号	図面頁	最大高	最大幅	最大厚	素材	詳細・備考
8	簪	A区	33号土壙	77	109	11.4	2.3	0.1	銅製	副葬品
13	鈴	A区	38号土壙	88	109	1.4	1.9	1.9	鉄製	混入品?
14	容器片	A区	38号土壙	88	109	1.7	4.2	0.2	鉄製	最大厚欄は器厚を記入 混入品?
15	キセル雁首	A区	40-2号土壙	94	109	5.3	1.4	2.1	銅製	竹材残存 副葬品
16	キセル吸口	A区	40-2号土壙	94	109	6.8	1.1	1.2	銅製	竹材残存 副葬品
17	キセル雁首	A区	53号土壙	113	109	5.0	1.2	2.0	銅製	竹材残存 副葬品
18	キセル吸口	A区	53号土壙	113	109	6.1	0.9	0.9	銅製	竹材残存 副葬品

その他の遺物

遺物番号	遺物名	地区	出土地点	図面番号	図面頁	最大高	最大幅	最大厚	素材	詳細・備考
6	数珠	A区	31号土壙	73	109	0.4	0.5	0.5	貝の可能性高い	同一土壙より同様のもの36点有り 副葬品
9	数珠	A区	37号土壙	84	109	0.7	0.5	0.5	貝の可能性高い	2個体結合 副葬品
10	銀色岩片	A区	37号土壙	84	109	1.0	1.4	0.2	鉱物	副葬品
21	簪	E区	6号土壙	140	109	11.5	1.7	0.3	ベッコウ製	同一土壙より他に破損品1個体分有り 副葬品

表6 出土銭貨観察表

地区	土壌	銭貨番号	分類	背面	出土状況備考	整理番号	
A区	10号土壌	1	新寛永銭		床直上、副葬品	委①1	
		2	新寛永銭			委①2	
		3	寛永文銭	文		委①3	
		4	新寛永銭			委①4	
		5	寛永文銭	文		拓②	
		6	古寛永銭			拓③	
		7	新寛永銭			南東端、破損のため混入か？	拓④
		8	新寛永銭			南端、破損のため混入か？	不⑤1
		9	詳細不明				不⑥2
	11号土壌	1	古寛永銭		床直上、副葬品	委①1	
		2	新寛永銭			委①2	
		3	寛永通寶詳細不明			委①3	
		4	新寛永銭			委①4	
		5	古寛永銭			委①5	
		6	寛永通寶詳細不明			委①6	
		7	寛永通寶詳細不明			委①7	
	12号土壌	1	寛永文銭	文？	床直上、副葬品	委②1	
		2	古寛永銭			委②2	
		3	古寛永銭			委③1	
		4	寛永文銭	文		委③2	
		5	新寛永銭			委③3	
6		新寛永銭		委③4			
7		新寛永銭	？	拓①			
13号土壌	1	開元通寶		床直上、副葬品	委①1		
	2	寛永文銭	文		委①2		
	3	新寛永銭			委①3		
	4	新寛永銭			委①4		
	5	寛永文銭	文		委①5		
	6	古寛永銭			委①6		
	7	古寛永銭			拓②		
14号土壌	1	古寛永銭		床直上、副葬品	拓①		
	2	古寛永銭			拓②		
	3	寛永通寶詳細不明			拓③		
15号土壌	1	詳細不明		布付着、保存処理 床直上、副葬品	保①1		
	2	詳細不明			保①2		
	3	詳細不明			保①3		
	4	詳細不明			保①4		
	5	詳細不明			保①5		
	6	詳細不明			保①6		
	7	寛永通寶詳細不明			拓②1		
16号土壌	1	詳細不明		布付着、保存処理 床直上、副葬品	保①1		
	2	詳細不明			保①2		
	3	詳細不明			保①3		
	4	詳細不明			保①4		
	5	詳細不明			保①5		
	6	詳細不明			保①6		
	7	詳細不明			保①7		
17号土壌	1	新寛永銭		床直上、副葬品	委③1		
	2	寛永文銭	文		委③2		
	3	古寛永銭			委③3		
	4	古寛永銭			委③4		
	5	古寛永銭			委③5		
	6	寛永文銭	文		拓①		
	7	寛永文銭	文		拓②		
19号土壌	1	詳細不明		布付着、保存処理 床直上、副葬品	保①1		
	2	詳細不明			保①2		
	3	詳細不明			保①3		
	4	詳細不明			保①4		
	5	詳細不明			保①5		
	6	詳細不明			保①6		
	7	寛永通寶詳細不明			保①7		
20号土壌	1	詳細不明		布付着、保存処理 床直上、副葬品	保①1		
	2	詳細不明			保①2		
	3	詳細不明			保①3		
	4	詳細不明			保①4		
	5	詳細不明			保①5		
	6	詳細不明			保①6		
	7	詳細不明			保①7		
21号土壌	1	古寛永銭		鉄付着 副葬品	委③1		
	2	新寛永銭			委③2		
	3	新寛永銭			委③3		
	4	詳細不明			拓②		
	5	詳細不明			拓④		
	6	詳細不明			不①		
	7	詳細不明			不⑤		

地区	土壌	銭貨番号	分類	背面	出土状況備考	整理番号
A区	24号土壌	1	古寛永銭		脇東上面一括、混入か？	拓①
		1	新寛永銭		鉄錆付着、鉄銭混入か？ 床直上、副葬品	委①1
		2	詳細不明			委①2
		3	詳細不明			委①3
		4	詳細不明			委①4
		5	詳細不明			委①5
		6	詳細不明			委①6
	7	詳細不明		委①7		
	29号土壌	1	寛永文銭	文	床直上、副葬品	委①1
		2	古寛永銭			委①2
		3	古寛永銭			委①3
		4	新寛永銭			委①4
		5	新寛永銭			委①5
		6	古寛永銭			委①6
		7	古寛永銭			委①7
	30号土壌	1	寛永通寶詳細不明		布付着、保存処理 床直上、副葬品	保⑤1
		2	詳細不明			保⑤2
		3	詳細不明			保⑤3
		4	詳細不明			保⑤4
		5	詳細不明			保⑤5
		6	詳細不明			保⑤6
		7	新寛永銭			拓④
		8	古寛永銭			委①1
		9	寛永通寶詳細不明			委①2
		10	新寛永銭			委①3
		11	新寛永銭			委①4
		12	新寛永銭			委①5
		13	新寛永銭			委②1
		14	新寛永銭			委②2
		15	新寛永銭			委③1
		16	寛永通寶詳細不明			委③2
		17	新寛永銭	？		委③3
		18	新寛永銭			委③4
		19	新寛永銭			委③5
	31号土壌	1	寛永通寶詳細不明		土壌に伴わない (脇上面出土) 混入か？	保①1
		2	詳細不明			保①2
		3	詳細不明			保①3
		4	詳細不明			保①4
		5	詳細不明			保①5
		6	詳細不明			保①6
		7	寛永通寶詳細不明			保①7
	33号土壌	1	寛永通寶詳細不明		布付着、保存処理 床直上、副葬品	保①1
		2	詳細不明			保①2
		3	詳細不明			保①3
		4	詳細不明			保①4
		5	詳細不明			保①5
6		詳細不明		保①6		
7		寛永通寶詳細不明		保①7		
34号土壌	1	古寛永銭		床直上、副葬品	委①1	
	2	古寛永銭			委①2	
	3	新寛永銭			委①3	
	4	新寛永銭			委②1	
	5	新寛永銭			委②2	
	6	新寛永銭			拓③	
	7	新寛永銭			拓④	
37号土壌	1	詳細不明		布付着、保存処理 布付着、保存処理	保④1	
	2	詳細不明			保④2	
	3	詳細不明			保⑤1	
	4	詳細不明			保⑤2	
	5	新寛永銭			拓①	
	6	古寛永銭			拓②	
	7	古寛永銭			拓③	
	8	詳細不明			不⑥1	
39号土壌	1	新寛永銭		床直上、副葬品	委①1	
	2	新寛永銭			委①2	
	3	新寛永銭			委③1	
	4	古寛永銭			委③2	
	5	新寛永銭			委④1	
	6	新寛永銭			委④2	
	7	古寛永銭			拓②	
40-1号土壌	1	鉄銭詳細不明		副葬品	委①1	
	2	鉄銭詳細不明			委①2	
	3	鉄銭詳細不明			委①3	
	4	鉄銭詳細不明			不②	
	5	鉄銭詳細不明			不③	
	6	鉄銭詳細不明			不④	

地区	土壙	錢貨番号	分類	背面	出土状況備考	整理番号	
A区	40-2号土壙	1	新寛永銭		副葬品	委② 1	
		2	新寛永銭			委② 2	
		3	新寛永銭			委② 3	
		4	新寛永銭			委② 4	
		5	新寛永銭			委② 5	
		6	新寛永銭			委② 6	
		7	新寛永銭			拓①	
		8	新寛永銭	足？ 下野足尾所鑄銭？			拓③
	42号土壙	1	新寛永銭		文	床直上、副葬品	委① 1
		2	新寛永銭				委① 2
		3	古寛永銭				委① 3
		4	寛永文銭				委① 4
		5	古寛永銭				委① 5
		6	新寛永銭				委① 6
		7	古寛永銭				委① 7
	45号土壙	1	詳細不明		鉄錆付着、鉄銭混か？ 床直上、副葬品	委① 1	
		2	詳細不明			委① 2	
		3	詳細不明			委① 3	
		4	詳細不明			委① 4	
		5	詳細不明			委① 5	
	48号土壙	1	新寛永銭		文小 江戸本所小帳所鑄銭？	床直上、副葬品	委③ 1
		2	寛永文銭				委③ 2
		3	新寛永銭				委③ 3
		4	古寛永銭				委③ 4
		5	古寛永銭				委③ 5
		6	寛永通寶詳細不明				委③ 6
		7	寛永通寶詳細不明				拓①
	49号土壙	1	新寛永銭		床直上、副葬品	委② 1	
		2	古寛永銭			委② 2	
		3	新寛永銭			委② 3	
		4	鉄銭詳細不明			委④ 1	
		5	鉄銭詳細不明			委④ 2	
		6	新寛永銭			拓①	
		7	寛永鉄銭			不③	
	50号土壙	1	新寛永銭		床直上、副葬品	委① 1	
		2	寛永通寶詳細不明			委① 2	
		3	新寛永銭			委① 3	
		4	寛永通寶詳細不明			委① 4	
		5	新寛永銭			委① 5	
		6	古寛永銭			委① 6	
		7	古寛永銭			委① 7	
	51号土壙	1	詳細不明		布付着、保存処理 床直上、副葬品	保③ 1	
		2	詳細不明			保③ 2	
		3	詳細不明			保③ 3	
		4	詳細不明			保③ 4	
		5	新寛永銭			委① 1	
		6	新寛永銭			委① 2	
7		古寛永銭		委① 3			
8		新寛永銭		拓②			
52号土壙	1	古寛永銭		文 床直上、副葬品	委① 1		
	2	寛永文銭			委① 2		
	3	新寛永銭			委② 1		
	4	古寛永銭			委② 2		
	5	新寛永銭			委③ 1		
	6	古寛永銭			委③ 2		
53号土壙	1	詳細不明		錆、布付着、保存処理 床直上、副葬品	保① 1		
	2	詳細不明			保① 2		
	3	詳細不明			保① 3		
	4	詳細不明			保① 4		
	5	詳細不明			保① 5		
	6	詳細不明			保① 6		
	7	詳細不明			保① 7		
54号土壙	1	新寛永銭		床直上、保存処理 破片	委① 1		
	2	新寛永銭			委① 2		
	3	新寛永銭			委① 3		
	4	新寛永銭			委② 1		
	5	新寛永銭			委② 2		
	6	詳細不明			拓③		
	7	鉄銭詳細不明			不④		

地区	土壙	錢貨番号	分類	背面	出土状況備考	整理番号
C区	2号土壙	1	寛永通寶詳細不明		床直上、副葬品	拓①
		2	古寛永銭			拓②
		3	古寛永銭			拓③
		4	古寛永銭			拓④
		5	寛永通寶詳細不明			拓⑤
		6	古寛永銭			拓⑥
	3号土壙	1	古寛永銭		文 床直上、副葬品	委① 1
		2	古寛永銭			委① 2
		3	寛永文銭			委① 3
		4	古寛永銭			委① 4
		5	古寛永銭			委① 5
		6	古寛永銭			委① 6
		7	古寛永銭			拓②
	4号土壙	1	寛永通寶詳細不明		鉄錆付着、鉄銭混か？ 床直上、副葬品	保④ 1
		2	詳細不明			保④ 2
		3	詳細不明			保④ 3
		4	詳細不明			保④ 4
		5	新寛永銭			拓①
		6	元豊通寶			拓②
		7	古寛永銭			拓③

地区	土壙	錢貨番号	分類	背面	出土状況備考	整理番号
D区	47号土壙	1	詳細不明		鉄錆付着、鉄銭混か？ 床直上、副葬品	委① 1
		2	詳細不明			委① 2
		3	詳細不明			委① 3
		4	詳細不明			委① 4
		5	詳細不明			委① 5
		6	詳細不明			委① 6
		7	詳細不明			委① 7

地区	土壙	錢貨番号	分類	背面	出土状況備考	整理番号
E区	6号土壙	1	新寛永銭		床直上、副葬品	委② 1
		2	新寛永銭			委② 2
		3	古寛永銭			委② 3
		4	新寛永銭			委② 4
		5	古寛永銭			拓①
		6	新寛永銭			拓③
		7	新寛永銭			拓④
		8	新寛永銭			拓⑤
	7号土壙	1	古寛永銭		床直上、副葬品	拓①
		2	新寛永銭			拓②
		3	古寛永銭			拓③
		4	新寛永銭			拓④
		5	新寛永銭			拓⑤
		6	寛永通寶詳細不明			拓⑥
		7	古寛永銭			拓⑦
	8号土壙	1	新寛永銭		布付着、保存処理 床直上、副葬品	保① 1
		2	詳細不明			保① 2
		3	詳細不明			保① 3
		4	詳細不明			保① 4
		5	詳細不明			保① 5
		6	詳細不明			保① 6
		7	新寛永銭			拓② 1

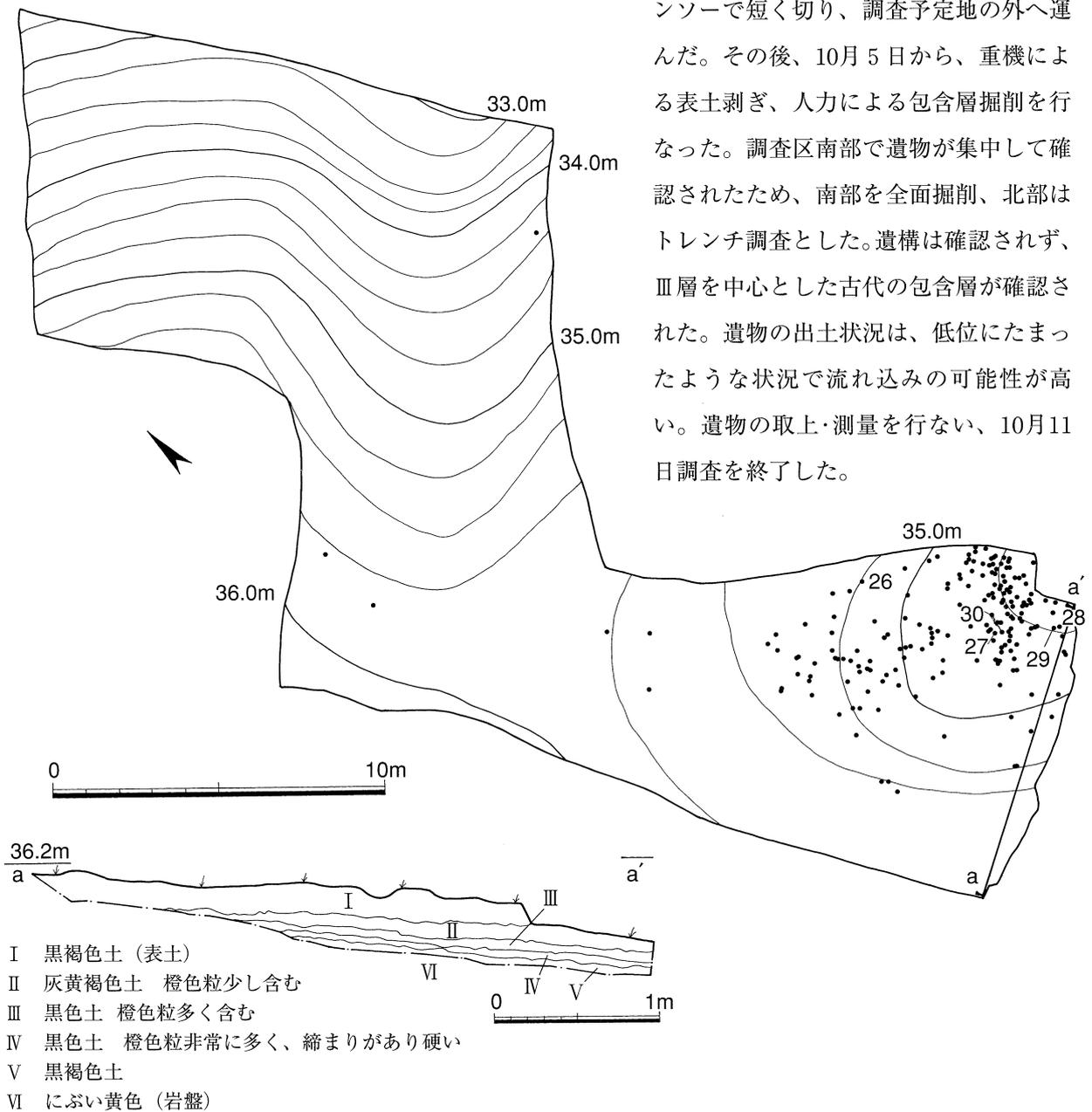
第三章 八反田遺跡の調査

第1節 調査

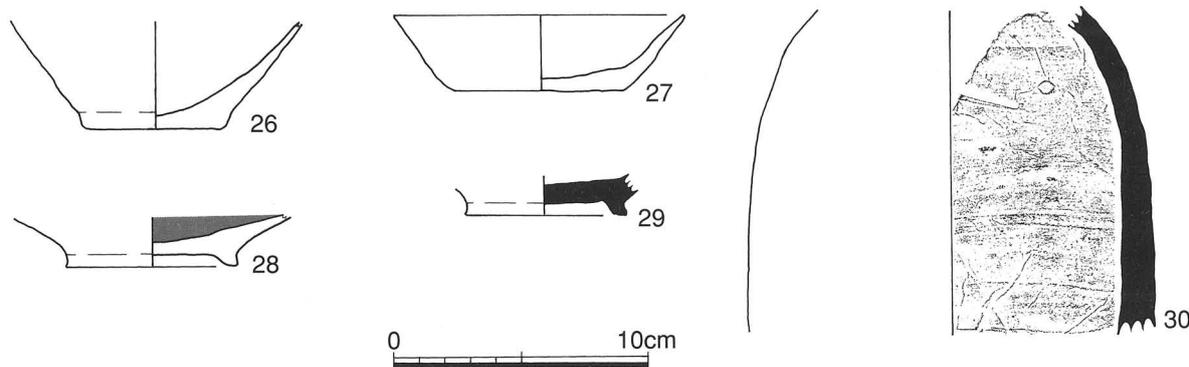
1 遺跡の概要

八反田遺跡は、八反田・川子地区墓地群から続く尾根の東側斜面に位置する。調査区は東側へ向け下り傾斜し、約4mの高低差を有する。

調査は9月26日に開始した。調査区には伐採済みの竹が倒したままの状態、まずその除去から行なった。竹をチェーンソーで短く切り、調査予定地の外へ運んだ。その後、10月5日から、重機による表土剥ぎ、人力による包含層掘削を行なった。調査区南部で遺物が集中して確認されたため、南部を全面掘削、北部はトレンチ調査とした。遺構は確認されず、Ⅲ層を中心とした古代の包含層が確認された。遺物の出土状況は、低位にたまったような状況で流れ込みの可能性が高い。遺物の取上・測量を行ない、10月11日調査を終了した。



第147図 八反田遺跡遺物分布図



第148図 八反田遺跡出土遺物実測図 (1/3)

表7 八反田遺跡出土遺物観察表

遺物番号	出土層位	種類	胎土	外面調整 外面色調	内面調整 内面色調	器高	口径	底部 径	備考
26	Ⅲ	土師器杯	1mm大の茶色粒 含む	ローリング 浅黄橙色 (Hue7.5YR8/3)	ローリング 浅黄橙色 (Hue7.5YR8/4)	(4.3)	(11.5)	5.6	底部糸切り
27	Ⅲ	土師器杯	1mm弱の白色粒 少し含む	ローリング 浅黄橙色 (Hue7.5YR8/6)	ローリング 浅黄橙色 (Hue7.5YR8/6)	3.0	11.4	6.6	底部ヘラ切り
28	Ⅲ	黒色土器皿	1~2mm大の茶色粒 粒数点含む	ローリング 灰白色 (Hue2.5Y8/2)	ローリング 黒色 (Hue2.5Y2/1)	(2.0)	-	6.8	黒色土器B類
29	Ⅲ	須恵器杯(椀)	1mm弱の灰色粒・透明粒 含む	回転利用のナデ 灰色 (Hue5Y5/1)	ナデ 灰色 (Hue5Y5/1)	(1.1)	-	6.4	
30	Ⅲ	須恵器壺	1mm弱の灰色粒・白色粒 少し含む	回転利用のナデ 灰色 (Hue5Y5/1)	回転タタキ後、ナデ 灰白色 (Hue5Y6/1)	(12.7)	-	-	

2 出土遺物

遺物は、土師器の杯、高台付杯(椀)、甕、黒色土器の皿、須恵器の高台付杯(椀)、壺が出土している。土師器は摩耗が激しく詳細な調整を観察することができないが、杯類の底部はヘラ切りによるものと思われる。また、布目を有する布痕土器の出土が無く、仮にローリングを受けて摩耗しているとしても、それらしい土器片はほんの数点にすぎない。

26と27は土師器である。26は体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、器高が高く約4.5cm程度になる。底部は円盤状である。27も直線的に立ち上がるが26と比べて器高が低くなる。28は黒色土器の皿で内面を黒く燻している。29と30は須恵器である。29は高台のみで上部の形状は定かでない。30は壺で下村Bタイプに似た形状のものと思われる。体部内面はタタキ痕をナデ消している。

時期は10世紀前後を中心とするが、27は下るものと思われる。

第Ⅳ章 分 析

第1節 宮崎県高岡町八反田・川子地区墓地群出土の近世人骨について

峰 和治

(鹿児島大学・大学院医歯学総合研究科・歯科応用解剖学分野)

1. はじめに

平成12年(2000)の県営ふるさと農道建設に伴う発掘調査で、東諸県郡高岡町大字上倉永に所在する八反田・川子地区の古墓群から、近世～近代に属するとみられる人骨が出土した。同町教育委員会の依頼により、筆者がこれらの人骨の整理・復元と形質人類学的鑑定の作業を担当したので、その所見を報告する。なお、墓の形態は隅丸方形の平面プランをもつ土壙墓で、鉄釘が検出された墓の存在から大半が木棺埋葬と推測されている。墓の年代については、土壙に対応する墓石に元禄あるいは宝永の元号が読み取れること、形式的に江戸時代中・後期のものと推測されるキセルがあることから、江戸時代を通じて使用された墓域との見方ができる。年代を特定できる墓は多くないが、この報告では八反田・川子墓地群の資料を一応、江戸時代を主体とする近世人骨群として扱うこととする。なお、かんざしや陶磁器、六道銭などの副葬品が検出された墓については、さらに詳細な年代分析が別途行われる可能性もある。

人骨が検出された墓は27基であるが、その内の1基(40号土壙)で部位的に重複する人骨片が見いだされた。量的にはわずかであり、墓の切り合いの可能性も否定できないが、全身が残っている訳ではなく、混入かどうかの正確な判定はできない。これを2個体分とみなした場合には28個体となる。保存状態は全般に不良であり、性別・年齢などの判定だけに限定される個体が多かったが、可能な限り骨計測を行って体格に関する基礎データの採取にも努めた。

2. 人骨所見

人骨の資料内容を表8に、主要個体の写真を図版1に示す。以下に、土壙ごとの人骨遺存状況と形質の概要を記載する。

●2号土壙：女性？、成人

大腿骨体上部の小骨片だけである。幅が狭く、華奢である。

●3号土壙：女性？、壮年

頭蓋と脛骨体の破片だけが遺存する。15本(上顎9、下顎6)の遊離歯があり、咬耗は切縁や咬頭にとどまる。上下顎の第3大臼歯には咬耗面がある。頭蓋冠は比較的薄い。

●6号土壙：性別不詳、小児(12歳)

頭蓋と体肢骨1片が遺存する。26本の残存歯は全て永久歯だが、第3大臼歯は歯根形成が1/4ほどで萌出前である。第2大臼歯にわずかな咬耗面が認められることから12歳前後と推測した。成長の途上であり、左下顎枝上端や上腕骨体は非常に繊細である。

●7号土壙：性別不詳、成人

ごく少量の下肢骨片が遺存する。緻密質の性状から、成人との見方ができるが、性の判定は不能であ

る。

●8号土壙：男性、壮年

頭蓋および体肢長骨片が遺存する。頭蓋縫合はラムダ周辺では全く閉鎖していないが、プレグマ部で内板の閉鎖が見られる。頭蓋冠の径は比較的大きい。大腿骨体は粗線が発達しているが細く、推定される長径は短い。

●9号土壙：性別不詳、年齢不詳

大腿骨の遠位付近とみられる小骨片1個で、性・年齢の判定は不能である。

●10号土壙：男性、成人

下肢左右の大腿骨および脛骨の骨体片が遺存する。骨体の太さから男性と判定され、成人に達しているとみられる。脛骨の扁平性や腓骨の槌状形成はない。

●12号土壙：女性、壮年

頭蓋冠と体肢の破片が少量遺存する。脛骨体とみられる破片は非常に華奢で、女性であろう。歯冠2点（上顎犬歯および下顎第2小臼歯）の咬耗は軽度である。

●13号土壙：性別不詳、年齢不詳

ごく少量の黒色破片が遺存するが、人骨（頭蓋冠破片）か有機物の断片か肉眼では正確に判別できない。

●16号土壙：性別不詳、年齢不詳

部位の特定できない頭蓋冠の小破片が遺存する。

●19号土壙：性別不詳、年齢不詳

ごく小さい骨片が遺存するだけである。

●20号土壙：女性、成人

側頭骨1片と体肢骨片が少量遺存する。脛骨体とみられる破片は非常に華奢であり、女性であろう。

●29号土壙：性別不詳、成人？

頭蓋冠と体肢骨体の破片が少量遺存するだけである。上顎小臼歯の歯冠片にごくわずかな咬耗が見られる。

●30号土壙：性別不詳、成人

左右の下肢骨片が残るだけである。

●34号土壙：男性、熟年

頭蓋冠と大腿骨体を含む下肢骨片が遺存している。矢状縫合は内板が閉鎖している。上腕骨の筋附着部がよく発達しており、頑丈である。

●35号土壙：性別不詳、壮年

左側の上下顎歯の歯冠が配列したまま、土で固められたブロックの状態に遺存する。歯根および骨質は腐食し、エナメル質に破折線が入っているため、周囲の土の除去を保留した。第3大臼歯まで萌出しているが、咬耗はごく軽度である。

●37号土壙：女性、壮年

頭蓋の小破片と左大腿骨体片が遺存している。大腿骨の上部は非常に扁平で細い。脳頭蓋片に残る縫合部分に閉鎖は見られない。

●40号土壌：2 個体

側頭骨が重複しており、明らかに2 個体分の人骨が遺存している。

(1) 人骨 A (40-1号) (男性、熟年)

頭蓋および大腿骨の形状から、比較的頑丈な体格をした男性と推定される。三主縫合の内板はほぼ閉鎖し、外板でも一部で癒合が始まっている。いわゆるoccipital bunningが顕著である。計測は不能だが、上面観で長頭の印象を受ける脳頭蓋である。頭蓋最大長は185を超えるようであり、左euから正中までの距離61の2 倍を最大幅とすると、長幅示数は65以下とみられる。脛骨の扁平性は見られない。

(2) 人骨 B (40-2号) (女性、壮～熟年)

頭蓋および下肢骨の形状から、比較的華奢な女性と推定される。頭蓋冠が全体に薄く、スカスカで軽い。第3 大臼歯を含む9 歯が遺存し、咬耗は中程度で象牙質に及んでいる。上顎洞内面に、慢性副鼻腔炎の徴候とみられる多孔性肥厚がある。

●45号土壌：男性、熟年

頭蓋冠だけが遺存する。径は全体的に大きく、後頭部のレリーフも凹凸が強い。乳様突起が大きい。ラムダ縫合と矢状縫合の内板がほぼ閉鎖している。計測は不能だが、上面観で長頭の印象を受ける脳頭蓋である。

●47号土壌：性別不詳、成人

脳頭蓋および下肢骨の破片が少量遺存する。成人には達している。右外耳道壁に骨腫は見られない。

●48号土壌：性別不詳、成人？

左側頭骨錐体の破片だけである。少なくとも成人には達しているであろう。

●49号土壌：性別不詳、小児 (7 歳)

頭蓋、下肢長骨、肋骨、椎骨の破片が遺存する。乳歯や未萌出の歯冠も含めて下に示す27 歯が確認され、歯根の形成程度や咬耗の状態から7 歳の小児と推定される。長骨骨体の太さもこれにほぼ符合する。上顎第1、第2 乳臼歯の咬合面に中度の齶蝕がある。上顎第1 大臼歯に顕著なカラベリー結節が見られる。

7	5	3	1	1	2	3	4	6	7	
						C	D	E		
E										
7	6	5	4	3	1	2	3	4	5	6

※遺存する全乳歯と第1 大臼歯が萌出し、それ以外は未萌出または萌出途上とみられる。

●50号土壌：男性、壮年

大腿と下腿の骨体片が左右とも残っている。長径は短い、緻密質は厚く、頑丈である。

●51号土壌：男性？、壮年

頭蓋と大腿骨の破片が少量遺存する。側頭骨錐体の大きさや大腿骨の幅径は大きく、男性の可能性が高い。右外耳道壁に骨腫は見られない。

●52号土壌：女性、壮年

頭蓋と下肢骨の破片が少量遺存する。頭蓋冠の縫合に閉鎖は見られない。右側の前頭骨頬骨突起や下顎頭は細くて扁平であり、左乳様突起は小さい。左上顎洞外側壁に多孔性の粗雑面が見られ、右顎関節の関節結節では海綿質が露出している。上顎左側の第1、第2 大臼歯の歯冠が遺存し、2 歯とも咬頭頂

が軽度に咬耗している。第2大臼歯の隣接面咬耗から、第3大臼歯の既萌出が推測される。また、小窩や隣接面表層にとどまる点状齲蝕がある。脛骨の幅径は小さく、女性の可能性が高い。

●53号土壙：男性、壮年

頭蓋および下肢骨の破片が遺存する。頭蓋冠は厚く、後頭骨外表面のレリーフは凹凸が強い。頭蓋冠の縫合に閉鎖は見られない。側頭骨錐体が大きく、下肢骨の緻密質も厚い。

●54号土壙：男性、壮年

頭蓋冠のほか、少量の長骨片が遺存する。ラムダ周辺の頭蓋縫合に閉鎖は見られない。側頭骨の錐体および乳様突起が比較的大きい。蝶形骨洞の内面に、軽度の慢性炎症を示す多孔性の粗雑部が見られる。

3. 形質のまとめと考察

八反田・川子墓地群出土の近世人骨28体には、保存不良ながらいくつかの特徴が見てとれた。年齢構成は、小児2体と熟年2体を除けば成人、壮年もしくは壮～熟年と判定された(表8)。江戸時代の平均寿命の短さからすると、高齢個体の少なさは妥当としても、小児2体以外に未成人骨が見いだせないのは不自然である。これには、成長途上にある個体の骨質の薄さが消失に傾かせた、もともと成人のようにはきちんと墓域に埋葬されなかった、などいくつかの理由が考えられる。墓の大きさや形態、副葬品なども加味すれば、さらに深い議論が可能であろう。

病的所見として、慢性炎症による骨壁の肥厚が上顎洞に2例と蝶形骨洞に1例見られた。上顎洞の古病理学的報告は比較的多いが、蝶形骨洞に関してはほとんど知られていない。筆者が知る限り、奄美大島和野トフル墓近世再葬人骨の1例だけである(小片ら、1988)。蝶形骨洞は破損しやすい部位であるため、これまで汎副鼻腔炎の波及が見過ごされてきたのではなかろうか。

体格に関しては、下肢骨に関するごく少数の計測値が得られただけである(表9)。長径は全て計測不能であったが、全体的には小柄であろうと推測される。大腿骨では、柱状性を示す1体があったが、それ以外では粗線が発達しておらず、骨体上部の扁平性も見られなかった。また、脛骨も扁平性を示さなかった。頭蓋の計測はほとんどできなかったが、脳頭蓋の上面観が前後的に長い傾向を示す男性頭蓋が2例含まれており、現代人に比べれば明らかに長頭的であった。顔面部や上肢に関しては、破損のため所見が得られなかった。

日本人の形質が近世以降、現代に向かって急激に変化してきたことはよく知られているが、同じ近世人の間でも地域によってかなり違った特徴をもつことが骨格資料の研究で明らかになりつつある。これまで江戸時代の人骨は、大量出土をみることの多い大都市部に集中する傾向があつて、それ以外の地域の住民についてはまだ不明な点が多いと言わざるをえない。形質変化の要因を明らかにしていくためには、時代変化を追究すると同時に、地域差や異なる環境のもとに暮らす人々の間にどのような違いがみられるかを明確にしておく必要がある。

長岡は東北、関東、近畿、九州の各地方から出土した江戸時代人の頭蓋および歯冠計測値を分析して、近畿を中心とした形質の同心円的構造を確認し、その出現時期を江戸時代以前と推測している(Nagaoka, 2003; 長岡・平田, 2003)。長岡が用いた九州の資料とは、主に北部九州出土のものであった。確かに近年、九州の北部各所でかなりまとまった数の近世墓が調査されており、上記の課題を検討していくための有力な手掛かりが得られるものと期待されている。一方、南部九州では今のところ、保存状

態のよい人骨を出土する大規模な墓地の調査は枕崎市松之尾遺跡（松下，1981）の他に例がない。少数の散発的な資料をまとめることには問題も多いが、大まかに当地域での傾向を把握することを目的として、いくつかの遺跡から発掘された江戸時代の資料を集計して、他地域の同時代人と比較を行った。資料は八反田・川子地区のほかに、筆者らが直接携わった都城市貴船寺跡、大口市王城古墓、串良町稲村城跡、南種子町広田近世墓、市来町市ノ原遺跡（第1地点）出土のものである。これらは、すべて土壙墓から検出されており、木棺や早桶の痕跡が残っている場合もあった。所属階層を判断する決め手には欠けるが、副葬品は六道銭などを除いて全般にわずかであり、少なくとも武士階級ではない。詳細な計測値は省略するが、概要はほぼ次のようにまとめられる。

a. 頭蓋の形質

南部九州近世人の頭蓋長幅示数は男女とも長頭性に属す。男性を比較した場合、熊本県の桑島ほどではないが、枕崎市の松之尾(中世末～近世)や山口県の吉母浜（中世）に匹敵する。短頭性の強い南部九州の現代人はもとより、大坂や江戸の同時代人との差が目立つ。また、バジオン・ブレグマ高が低く、長高示数や幅高示数も小さい。

顔面部では、頬骨弓幅などの幅径が大きく、高径が小さいため、顔示数や上顔示数は低・広顔の度が強い。やや歯槽性突顎の傾向が見られる。鼻根部はそれほど扁平でない。

b. 体肢骨の形質

女性の計測例数が極めて少ないので、男性のみの比較を行った。とはいえ、男性の場合も例数が少なく代表性には問題があるが、長径は比較群と同等以上の大きさをもつ。骨体の幅径や周径に比較群と目立った違いはない。上腕骨や脛骨骨幹の扁平性は認められない。大腿骨骨幹の柱状性は弱い、上部はやや扁平である。大腿骨から求めた推定身長は男性160.8cm（2例）、女性は147.9cm（2例）である。

以上、南部九州6か所の近世人骨の所見を総合すると次のように言えるであろう。

①脳頭蓋は長頭性が強く、頭高は低い。

②顔面部は低・広顔の度が強い。やや歯槽性突顎の傾向が見られるが、鼻根部はさほど扁平ではない。

③体肢骨は近世人集団の中では長いほうである。骨幹の幅径に比較群との違いは目立たない。骨幹断面の形状では、上腕骨や脛骨の扁平性はなく、大腿骨の柱状性も弱い。

南部九州近世人に見られた顕著な特徴は長頭性で、北部九州でもこうした傾向にあることが既に指摘されている（中橋，1987）。ただし、南部九州においてはその度合いが全般に強く、低・広顔性と併せて中世的特徴が他の地域よりも色濃く残っていた可能性を示唆している。頭蓋9項目を用いて南部九州近世人からのペンローズ形態距離を算出してみると、比較群の中では同一地域の松之尾中・近世人が最も近いという結果となった。次いで中世の吉母浜がくるが、大坂や江戸の近世人とともに桑島は少し離れる。最も距離が大きいのは南部九州の現代人である。北部九州では少なくとも明治・大正期まで長頭傾向が遺存したと考えられるが、南部九州人については江戸時代における長頭傾向から一転して、近代以降は強い短頭性を示すことが生体計測の立場からしばしば指摘されてきた。こうした形質変化の方向性の違いが九州の南北で認められる。その具体的な要因は不明であるが、南部九州でいつ頃から短頭化が急激に進行し出すのかを明らかにできれば、ひとつの手掛かりとなるであろう。

主要参考文献

松下孝幸, 1981: 鹿児島県松之尾遺跡出土の人骨. 「松之尾遺跡」(枕崎市), pp. 215-228.

Nagaoka T, 2003: Secular changes in Japanese crania from the late Edo period to the modern period. Anthropological Science 111: 1-29.

長岡朋人, 平田和明, 2003: 江戸時代人の歯冠サイズの地理的変異. Anthropological Science (J-Ser.) 111: 143-154

中橋孝博, 1987: 福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨. 人類学雑誌 95: 89-106.

小片丘彦, 峰和治, 他, 1988: 鹿児島県奄美大島和野トフル墓出土の人骨. 「下山田Ⅱ遺跡・和野トフル墓」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 45: 261-326.

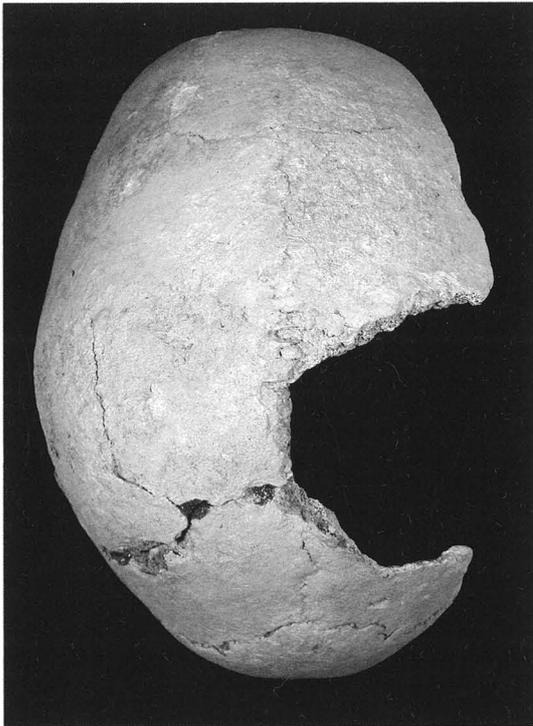
表8 八反田・川子地区墓地群出土の人骨資料

土壙番号	性	推定年齢	土壙番号	性	推定年齢
2号	女性?	成人	34号	男性	壮~熟年
3号	女性?	壮年	35号	不詳	壮年
6号	不詳	小児(12歳)	37号	女性	壮年
7号	不詳	成人	40号A	男性	熟年
8号	男性	壮年	40号B	女性	壮~熟年
9号	不詳	不詳	45号	男性	熟年
10号	男性	成人	47号	不詳	成人
12号	女性	壮年	48号	不詳	成人?
13号	不詳	不詳	49号	不詳	小児(7歳)
16号	不詳	不詳	50号	男性	壮年
19号	不詳	不詳	51号	男性?	壮年
20号	女性	成人	52号	女性	壮年
29号	不詳	成人?	53号	男性	壮年
30号	不詳	成人	54号	男性	壮年

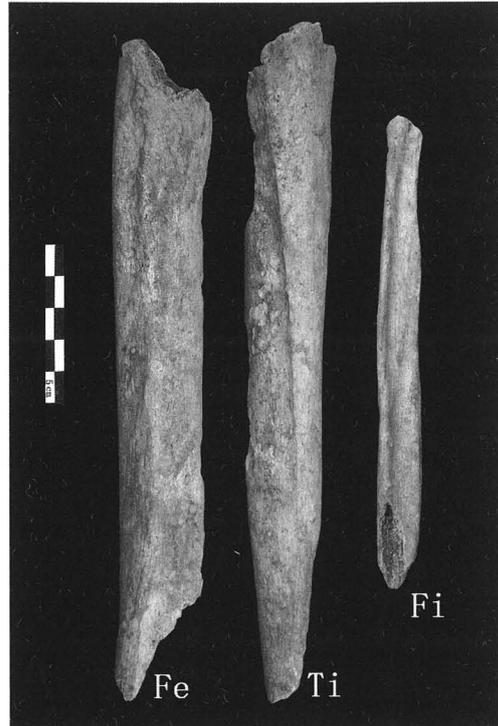
注: 年齢は20歳以上を成人とし、壮年は20~40歳、熟年は40~60歳の範囲を目安とする。?がつくのは性判定の精度が落ちる個体。

表9 下肢骨の計測値(mm)

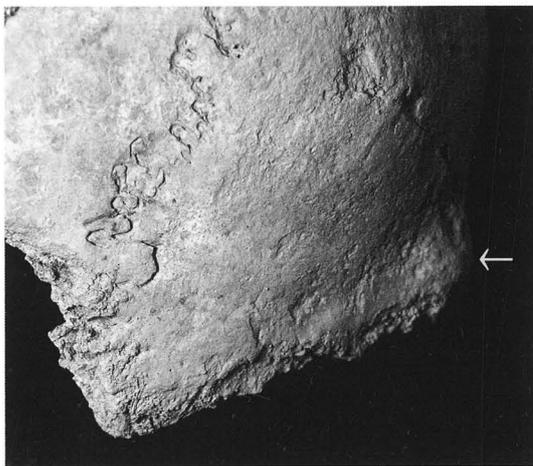
大腿骨	8号左	37号左	40号A右	50号左
6 骨体中央矢状径	27	23	27	23
7 骨体中央横径	22	23	27	23
6/7 骨体中央断面示数	122.7	100.0	100.0	85.2
9 骨体上横径	26	28	32	30
10 骨体上矢状径	23	19	25	21
10/9 骨体上断面示数	88.5	67.9	78.1	70.0
脛骨	9号右	50号左	52号右	
8 中央最大矢状径	30		27	
9 中央横径	22		22	
9/8 中央断面示数	70.0		81.5	
8a 栄養孔位最大径		26		
9a 栄養孔位横径		22		
9a/8a 脛示数		84.6		



1. 40号墓人骨. 頭蓋上面. 長頭的.



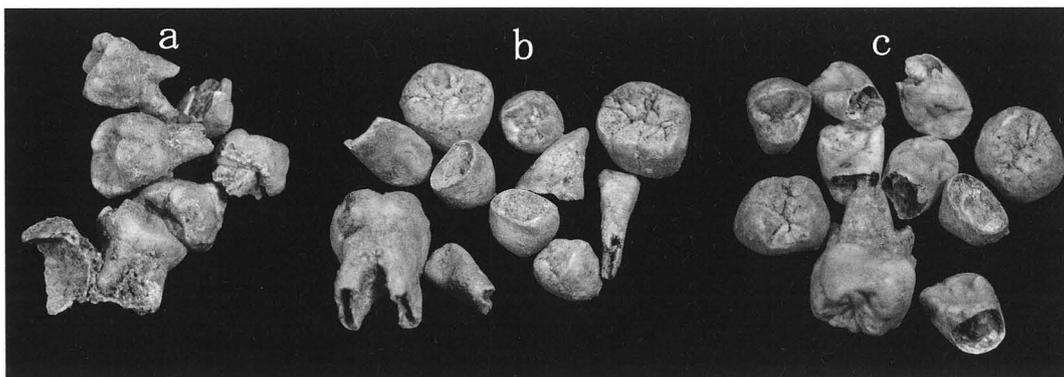
2. 50号墓人骨. 下肢.
Fe大腿骨, Ti脛骨, Fi腓骨.



3. 40号墓人骨. Occipital bunning.



4. 54号墓人骨. 蝶形骨洞内面の炎症性肥厚.



5. 49号墓人骨. 7歳前後と推定された混合歯列期の歯群.
a乳歯, b下顎永久歯, c上顎永久歯.

第2節 八反田・川子地区墓地群出土木製品の樹種調査結果

(株) 吉田生物研究所

1. 試料

試料は高岡町八反田・川子地区墓地群から出土した雑具2点である。

2. 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柀目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果(タケ類1種)の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) イネ科タケ亜科 (Subfam. Bambusoideae)

(遺物No. 2, 4)

(写真No. 2, 4)

No. 2は横断面と接線断面、No. 4は横断面しか試料を採取出来なかった。

No. 4では横断面にタケ亜科の特徴的な維管束が見られる。No. 2は特徴的な維管束は見られないが遺物の残存状態と細胞の形状をNo. 4と比較した結果、No. 4と同種のものと考えられる。

参考文献

島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版(1988)

島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社(1982)

伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所(1999)

北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社(1979)

深澤和三「樹体の解剖」海青社(1997)

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)

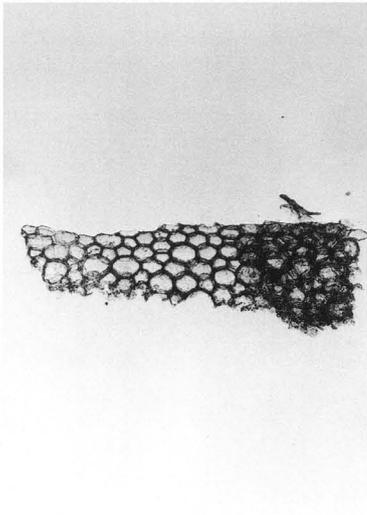
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

使用顕微鏡

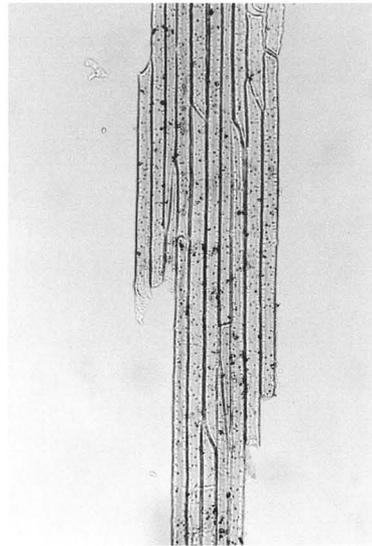
Nikon MICROFLEX UFX-DX Type 115

表10 高岡町八反田・川子地区墓地群出土木製品同定表

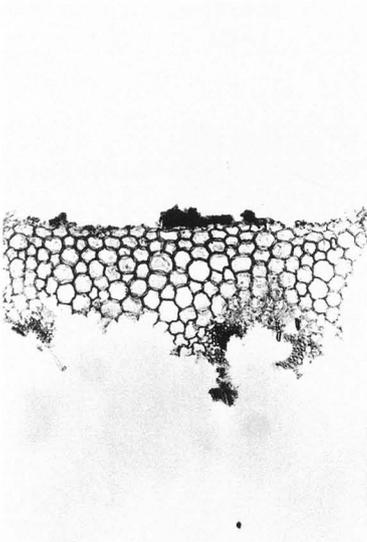
NO.	遺構名	品名	樹種
2	40-2号土壙	キセル雁首	イネ科タケ亜科
4	53号土壙	キセル雁首	イネ科タケ亜科



横断面×40
No-2 イネ科タケ亜科



接線断面×100



横断面×40
No-4 イネ科タケ亜科

第3節 八反田・川子地区墓地群出土材質不明遺物の成分分析

(株) 吉田生物研究所

1. はじめに

高岡町に所在する八反田・川子地区墓地群から出土した銅銭には、布片が付着していた。そしてその布片の上に、約1.5cm四方の光沢のある銀色の薄片が検出された。この遺物について、その材質を調査する目的で以下の通り成分分析を行ったのでその結果を報告する。

2. 資料

調査した資料は表11に示す37号土壌より出土した不明遺物1点である。

表11 調査資料一覧

No.	保存処理No.	遺物名	概要
1	18	不明遺物	約1.5cm四方の光沢のある銀色の薄片。層状の構造を呈する。

3. 方法

理学電機工業(株)製の全自動蛍光X線分析装置3270E (検出元素範囲B~U) によって資料本体に蛍光X線を照射して分析した。

4. 分析結果

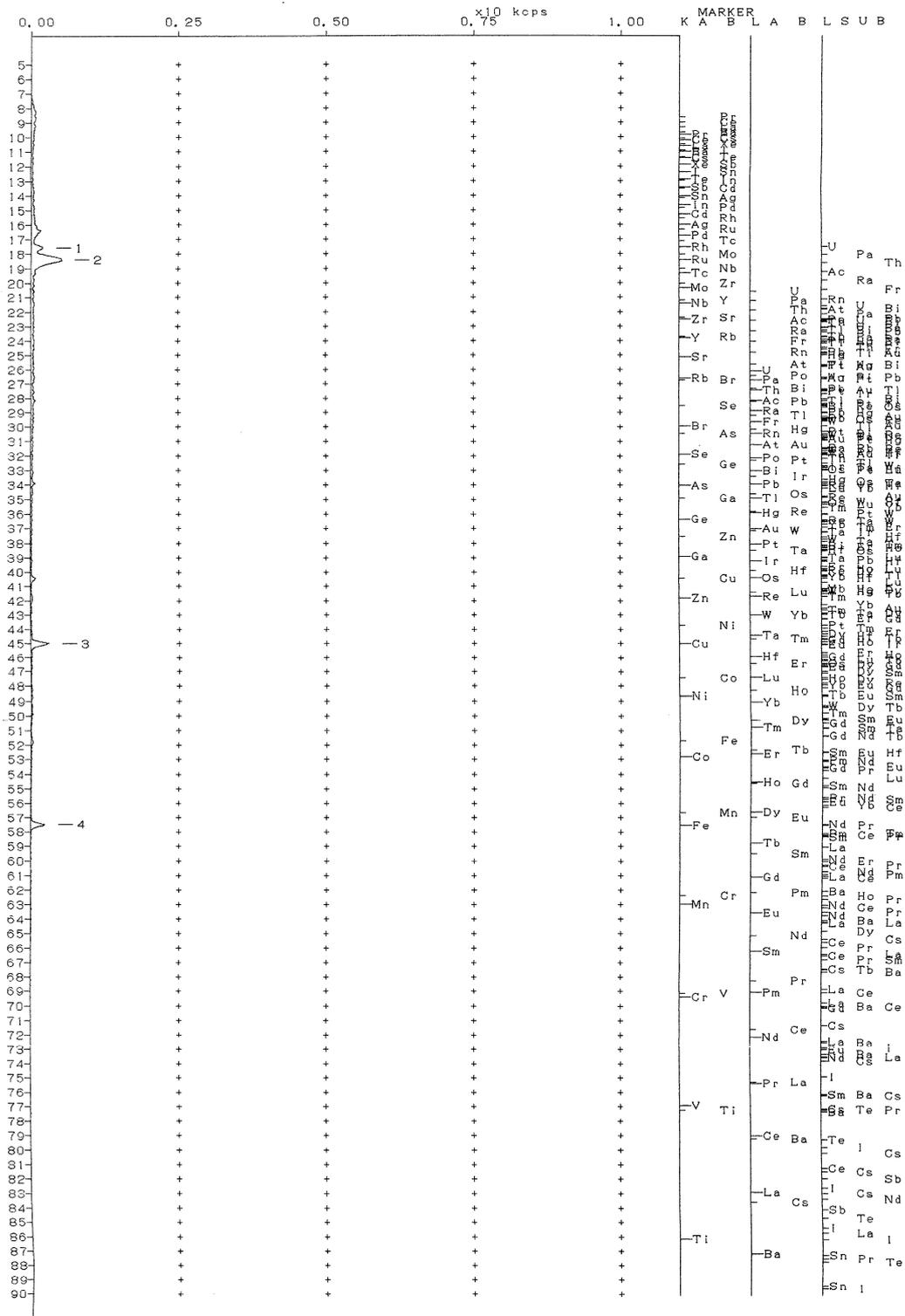
Al, Si, S, K, Fe, Cuが検出された。金属のFe, Cuの含有率は極めて低く、これらの金属の合金とはいえない。Siの含有率が一番高いため、岩石由来の可能性が高い。

表12 銀色部分の成分分析結果表

元素名	含有率 (%)
Al	25
Si	39
K	0.99
Fe	5.6
Cu	3.3

表13 元素サイクル

T# ショフコート 試料名 B# 元素コード
 2 STP テイセイ タカオカ18 41 Hv00



第Ⅳ章 まとめ

八反田・川子地区墓地群は、江戸時代から昭和50年代まで存続する墓地である。以下に江戸時代における八反田・川子地区墓地群について、項目ごとにまとめる。

1 石材について

本墓地群で墓石に使用された石材は、溶結凝灰岩である。この石材は、高岡町内では、浦之名地区を中心とした浦之名川・大淀川流域に産地があり、通称「高岡石」と呼ばれる。高岡石は、江戸時代には、墓石や武家屋敷の石垣として使用されていた。『高岡郷土史』^{註1}によると「古来郷土の産物として石材は其重なるものなり殊に我が浦之名石は其質堅く上等の墓石として最も重んぜらる郡内は勿論郡外妻佐土原方面より注文多く年額約1萬圓以上に上れり石工は各石場を所有し採取しつくせば復他の石場を開掘し幾十百年の間今尚石材の盡くるを知らず依りて如何に石材の豊富なるかを察するに足るべし。」とあり、良質の石材が豊富に産出し、高岡の産物として流通していたことがわかる。また、石の硬さによって用途が異なり、やわらかいものはかまどに、かなり硬いものは住宅の棟石・農家の堆肥小屋の基礎石に、さらに硬いものは墓石・鳥居・石垣・燈籠い、最も硬いところは、餅つき臼石に使用されていたという^{註2}。

【参考文献】

註1 本田親典編『高岡郷土史』1932

註2 谷山秀利「高岡の石屋さん」『たかおか-大正の高岡-』第10号 高岡を語る会 1982

2 墓標の形式変遷

第Ⅱ章で、墓標の形式を頭部形態と正面形態とで分類した(第5図)。その結果、A-1, 2, 3, 4類、B-1, 2, 3, 4類、C-1, 2類、D-1, 2類、E-2類の13種類に分類できた(表2)。このうちA-1類(頭部切妻形・正面平坦)が29基、A-2類(頭部切妻・正面花燈形)が31基、B-2類(頭部寄棟・正面花燈形)が26基、B-4類(頭部寄棟・正面花燈形+条線)が15基で、全体の約7割を占める。A-1類は半数が子供の墓である。年代別に見ると、1660年代~90年代にはいわゆる板碑形であるB-3類(頭部寄棟・正面条線)が主流である。1700年代になると、A類や他のB類が多くなるが、A-1類とA-2類はその後幅広い年代で見られるのに対し、B-3類は1730年代まで、B-2類、B-4類は1720年代から1780年代に限られ、1780年代にはB類はすべて姿を消す。D-2類(頭部かまぼこ・正面花燈形)は1800年代から、D-1類(頭部かまぼこ・正面平坦)は1860年代から出現する。さらに墓標の大きさは時代が下るにつれて小型化する傾向がある。(藤木)

3 墓碑について

墓標に刻まれる墓碑からは、墓標が作成された年代や被葬者に関するデータを知ることができる。そして、これら被葬者のデータから、この墓地群には、鹿児島藩時代(江戸時代)の穆佐郷の郷土層と農民層の2つの階層に所属する人々が埋葬されていることがわかる。以下、墓標からわかる2つの階層についてまとめる。

①郷土層

鹿児島藩では、鹿児島にある藩主の居館である鶴丸城のほか、藩内各所に102の外城(郷)を置き、

各外城に麓と呼ばれる武士集落をつくり多くの武士（郷士）を住ませた。そして、これら郷士たちは、外城の様々な役職に就いて外城の軍事・行政を管轄するとともに、一朝ことあるときには軍団として編成された。

八反田・川子地区墓地群は、この102の外城の一つである穆佐郷に属していた。そして、墓地群にある墓石には、明らかに穆佐郷士の家の墓石と考えられるものを散見することができる。墓標観察表（表3）から抽出すると、重信家3基（10・33・49号）、谷口家2基（32・57号）、山下家1基（37号）、押川家8基（67・107・108・109・110・111・112・113号）、山本家8基（132・134・142・146・147・155・156・157号）、山口家3基（141・144・149号）、岩切家3基（123・145・150号）、真方家1基（135号）、合計8家29基の墓標が確認できる。

次に、これら8家29基の墓標の年代について見てみると、各家の墓石の作成年代の範囲は、重信家（1699～1753）、谷口家（1747～81）、押川家（1689～1799）、山本家（1749～1813）、山口家（1744～77）、岩切家（1749～89）、真方家（1828）となっている。これによると、これらの家々の墓石のほとんどは18世紀に作成されたもので、ここで見る限り幕末・明治時代に墓石が連続しているようには考えられない。恐らく、各家々がそれぞれの時期において、庄屋役や浦行司役など、農村や山林に係る郷の役職に就き、限定された期間この墓地を使用したのではないかと考えられる。

②農民層

鹿児島藩では、藩領全般において門割制度と呼ばれる独特の農村制度を施行していた。門割制度の基本単位である門は、中世に由来するものであるが、島津氏の領国経営が進み、万治内検から享保内検が実施されるまでの間に近世的な門へと編成されていった。

門を構成する農民には、名頭と呼ばれる門の長と、名子と呼ばれる平百姓数戸があり、名頭の責任のもとに、門を単位として農業生産及び租税の納入が行われた。

ところで、『高岡町史 上巻』によれば、八反田・川子地区墓地群が位置する外城穆佐（穆佐郷）の上倉永村には58の門があった。また、上倉永村は、的野地区と西浦地区（現在の上倉地区）に分けられるが、墓地群がある西浦地区には30の門があった（『高岡町史 上巻』に記載されている門名については、典拠・年代が記されていないため、すべての門が江戸時代を通じて存在したかどうかは不明である）。

八反田・川子地区墓地群の中で、門名が刻まれた墓標を墓標観察表（表3）から抽出すると、「徳丸門」（4号）「前藪門」（51号）「山出門」（69・71号）「出山門」（74・77号）「大西門」（79・86号）「北ノ迫門」（130号）の6門（9基）が見られる。この中で、「徳丸門」「山出門」「出山門」「大西門」「北ノ迫（北迫）門」の5つの門名が前述した西浦地区の30の門の中に名前が見える。また、観察表の中で87・88号にはそれぞれ「瀬泉勘左エ門妻」「瀬泉勘左エ門」と刻まれているが、この「瀬泉」は前述した西浦地区の30門中にある「頼泉門」のことではないかと考えられる。

87・88号を含めた11基の門名が刻まれた墓石の年代を見てみると、最も古いものは69号の元文4年（1739）で、その後は宝暦期（1751～63）に5基、安永期（1772～80）に2基、文久期（1861～63）に1基、年代不詳が2基となっている。

以上、墓標から推測される八反田・川子地区墓石群の被葬者についてまとめてみると次のようなことがいえる。一つは、鹿児島藩時代の穆佐郷士層の墓地として使用されていたことがわかるが、墓石の作成年代の期間が18世紀頃にほぼ限定されることから、各家が庄屋役・浦行司役など郷の役職に係る

在村に居住した時期の墓地ではないかということ、もう一つは、穆佐郷上倉永村の門に所属する農民層の墓地として使用されたということである。データが少ないためにあくまで推測の域は出ないが、郷士層・農民層の2つの階層が混在する墓地の一事例として、今後、鹿児島藩の在村のあり方を知る上で参考とすべき遺跡といえるだろう。(今城)

【参考文献】

原口虎雄著『鹿児島県の歴史(県史シリーズ46)』山川出版社 1973

『高岡町史』高岡町1987

4 埋葬主体部について

埋葬主体部である土壙の平面形状は、切り合いなどで全体の形状が不明なものを除くと、隅丸長方形もしくは隅丸方形を呈する。土壙の主軸を、南北方向にとるものが最も多い。また、木片や鉄釘が出土した土壙もあり、それらは木棺墓であったと考えられる。

人骨の残存状況は良好とはいえないが、37・40・2・49・51・52・53号土壙は比較的残存状況が良好で、頭蓋(頭骨)が北、下肢骨(足の骨)が南に位置する。その関係から、被葬者は、頭を北向きにして足を折り曲げた状態で埋葬された可能性が高い。

5 副葬品

被葬者の副葬品と考えられる遺物が出土した土壙は、55基中、36基である。いわゆる「三途の川の渡し賃」といわれる六道銭・貨幣がもっとも多く、36基からの出土が確認された。他に、磁器が3基、数珠が2基、簪が2基、キセルが2基の土壙からそれぞれ出土した。

土壙から出土した貨幣は、総数263枚に上る。その内訳は、古寛永銭53枚、寛永文銭14枚、新寛永銭80枚(背文「小」1、「足」1、不明2、なし76)、寛永鉄銭1枚、寛永通寶で細分の出来ないもの14点、鉄銭9枚、開元通寶1枚、元豊通寶1枚、詳細が不明なもの25枚、密着状態で保存処理を施したもの65点である。出土状態から、副葬品と考えられるものを見ていくと、7枚セットで出土したものが一番多く25土壙あった。8枚セットが5土壙、6枚セットが4土壙、5枚セットと3枚セットがそれぞれ1土壙ずつである。本墓地群では、7枚セットが一般的であったと考えられる。鹿児島藩領などの南九州の近世墓で主流の7枚セットの六道銭として位置づけることが出来る。また、被葬者と六道銭の位置関係については、詳細な位置がわかるものはないが、頭骨と下肢骨の間で出土しているものが多い。布袋や布包みの存在を示す繊維が付着していた六道銭は、11件確認された。

陶磁器は、6号土壙と31号土壙、33号土壙で副葬品として出土した。6号土壙は調査の結果、明治～大正の所産と判明した。31号土壙、33号土壙から出土した小杯は、いずれも、肥前の染付で18世紀前半～中葉の所産である。その他にも土壙への混入品として17世紀後半～18世紀の陶磁器が出土している。これらは、御供え用ものと、今調査で確認できなかった古い土壙の副葬品と大きく分かれるであろう。数珠玉(31号土壙から37点、37号土壙から2粒が密着した状態のものが1点)は、貝製の可能性が高い。37号土壙のものは、連結せずに単体で用いたものか。簪のうち、6号土壙のものは2点ともベッコウ製である(1点のみ凶化)。37号土壙のものは厚みが1mmとかなり薄いもので、端部に装飾が施される。4カ所に穿孔が確認されるが、錆と劣化が激しく詳細は不明である。キセル(40・2号土壙と53号土壙で出土)は、金属製の雁首と吸口のほか竹製の吸管が若干残存していた。いずれも18世紀後半以降の所産と考えられる。(藤木)

写真図版 1



A区墓石



A区墓石



A区墓石



A区土壙完掘状況 1



A区土壙完掘状況 2



B区土壙完掘状況



C区土壙完掘状況



D区土壙完掘状況



川子地区近景



表土剥ぎ



墓石移動作業



掘削作業



土壌測量



人骨調査



八反田遺跡土層



八反田遺跡遺物出土状況



1 (26号土壤)



2 (26号土壤)



3 (26号土壤)



4 (26号土壤)



5 (31号土壤)



7 (33号土壤)



11 (38号土壤)



12 (38号土壤)



19 (43号土壤)



20 (6号土壤)



22 (7号土壤)



9 (37号土壤)



14 (38号土壤)



6 (31号土壤)



23 (7号土壤)



24 (7号土壤)



25 (7号土壤)



13 (38号土壤)



15 (42-2号土壤)



16 (42-2号土壤)



17 (53号土壤)



18 (53号土壤)



21 (6号土壤)



8 (33号土壤)

貨幣 (A区)



10号土壤1~4



11号土壤1~7



12号土壤1, 2



12号土壤3~6



13号土壤1~6



15号土壙1~6



16号土壙1~7



17号土壙1~5



19号土壙1~7



20号土壙1~6



21号土壙1~3



29号土壙1~7



30号土壙1~7



31号土壙1~6



31号土壙8~12



31号土壙13, 14



31号土壙15~19



33号土壙1~7



34号土壙1~3



34号土壙4, 5



37号土壙1, 2



37号土壙3, 4



39号土壙1, 2



39号土壙3, 4



39号土壙5, 6



40-1号土壙1~3



40-2号土壙1~6



42号土壙1~7



45号土壙1~5



48号土壙1~6



49号土壙1~3



49号土壙4, 5



50号土壙1~7



51号土壙1~4



51号土壙5~7



52号土壙1, 2



52号土壙3, 4



53号土壙1~7

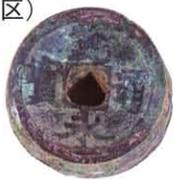


54号土壙1~3



54号土壙4, 5

(C区)



3号土壙1~6

(D区)



4号土壙1~4

(E区)



47号土壙1~7



6号土壙1~4



8号土壙1~7

第14表 報告書登録抄

フリガナ	ハッタンダ・カワコチクボチグン ハッタンダイセキ
書名	八反田・川子地区墓地群 八反田遺跡
副書名	県営ふるさと農道緊急整備事業(小山田地区)に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	第6巻
シリーズ名	高岡町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第35集
編集者名	藤木晶子
発行機関	高岡町教育委員会
所在地	宮崎県東諸県郡高岡町大字内山2887番地
発行年月日	2005年3月31日

収蔵遺跡名	所在地	コード		緯度	経度	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
八反田・川子地区墓地群 八反田遺跡	東諸県郡高岡町 大字上倉永 311-4外	45-381	336 335	31° 55'20"	131° 20'00"	2000.7.8 ~10.11	750m ²	農道整備
遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物		特記事項		
八反田・川子地区墓地群	墓地	近世	土壙	貨幣、陶磁器、簪 数珠、キセル				
八反田遺跡	散布地	古代		土器				

高岡町埋蔵文化財調査報告書第35集
八反田・川子地区墓地群 八反田遺跡
2005年3月

編集・発行 高岡町教育委員会
〒880-2292
宮崎県東諸県郡高岡町大字内山2887
TEL. 0985-82-1111

印刷 株式会社宮崎南印刷
〒880-0911
宮崎県宮崎市大字田吉350-1
TEL. 0985-51-2745